Ⅷ おわりに

1. 考　　察

墳丘・墓壙・石室・石棺・副葬品・被葬者

向野田古墳は、熊本県宇土市松山町3993番地（後円部）を主とした地点にある。その北方丘陵は前方部をはじめかなり広く削平されてしまった。

宇土半島基部前方後円墳群の1基として、女夫塚古墳・松橋大塚古墳などを除き、他の前方後円墳の例とともに近年続いて筆者らにより発見されたものである。[①]

この古墳は半島基部の前方後円墳の中にあって、今のところ唯一の処女墳であったことも特記される。多くの古墳が盗掘・破壊されている中に、ことに後円部において原初的な姿を残してこられたのは謎といってよかろう。

半島基部の前方後円墳の分布について、宇土半島基部前方後円墳群として、それらの古墳の間に竪穴式石室から横穴式石室への変遷過程がみられ、さらにいくつかの小グループを形成している。また出土遺物の中に、城ノ越古墳の三角縁四神四獣鏡、チャン山（茶臼山）古墳の鳥獣鏡、[②]また国越古墳の画文帯神獣鏡・四獣鏡・獣帯文鏡、[③]さらに向野田古墳の3面の鏡を加え、とくに国越の画文帯神獣鏡は熊本県江田船山古墳出土のものと同笵鏡の関係が指摘され、[④]半島基部前方後円墳の考察にあらたな視点がひらかれ、今後の追究に期待がもたれる。

向野田古墳の立地は、半島基部狭隘地帯東側丘陵の南端上にあり、不知火・有明両海を控え、熊本・八代両平野を結ぶ重要なルートを扼する地位を占め、どちらかといえば不知火海へ志向する形を示している。標高37m余の丘陵尾根の自然地形を利用し、岩盤を削って、墳丘を築成し、また石室を構築している。

1. 墳　　丘

墳丘は、丘陵尾根南端に後円部を、その北方に前方部があり、前方部切断の形を呈していた。宇土地方で前方部切断の例に擂針山古墳があったが、[⑤]その前方部は道路化してしまった。向野田の場合、墳丘は丘陵尾根いっぱいに跨り、墳丘斜面の段築は明らかでない所がある。墳丘に葺石のあることは前方部先端の高み、後円部墳頂のほか、東・西・南三斜面の残存の葺石の所在により確かめられた。ただ墳形の変容が甚しく、わずかに前方部東北の一角から三段築成ではなかったかと推測される。葺石がコンターの－4m～－5m辺に、また－7m～－8m辺に見出されることも参考される。ただ葺石を探し求めた発掘が局部的であって、東・南両斜面が雑木林に覆われたこともあり、全容を推定することはできかねた。

なお葺石が東西両斜面でわずかであるが、コンターの－14m～－15m、また斜面裾近くにもあった点は、墳丘斜面落下の葺石かどうか、またそうした斜面下方まであって、聖域視されたものかどうか、今後の問題点としておく。

墳丘に企画性のあることは、前方後円墳に関心を抱くとき、想像されることである。今回、椚国男氏の「古墳の設計」を読み、墳形実測図に当たったところ、意外にも日葉酢媛陵型に近いことが明らかとなった。墳丘の計測数値は松本雅明博士の計測を参照して、実測図から墳丘長を86m前方部幅を33.5mとした。ＡＢ：ＣＤ：ＥＦ＝８：４（２）：3.1弱となった。日葉酢媛陵型の第二型式は、「後円部が大きくなり、このために短かくなった前方部を、幅と開きの増加によって補った設計型、山裾の緩傾斜地や平坦部などに自然地形を生かして築造され、主体部は竪穴式石室で、石棺が使われはじめる。埴輪は円筒型のほかに器財埴輪も現われ、墳丘の裾に沿ってクビレ型の濠がめぐらされる。成務陵や神功皇后陵に代表され、その設計比は、８：４（３）：3.5である」とある。[6] 向野田の場合、主体部は似るけれど、丘陵尾根にあり、濠はなかったとみられる。墳丘長八分比設計が行なわれたのではないかと考えられるが、ひとつの試みとして検討を待ちたい。

2. 墓壙・石室

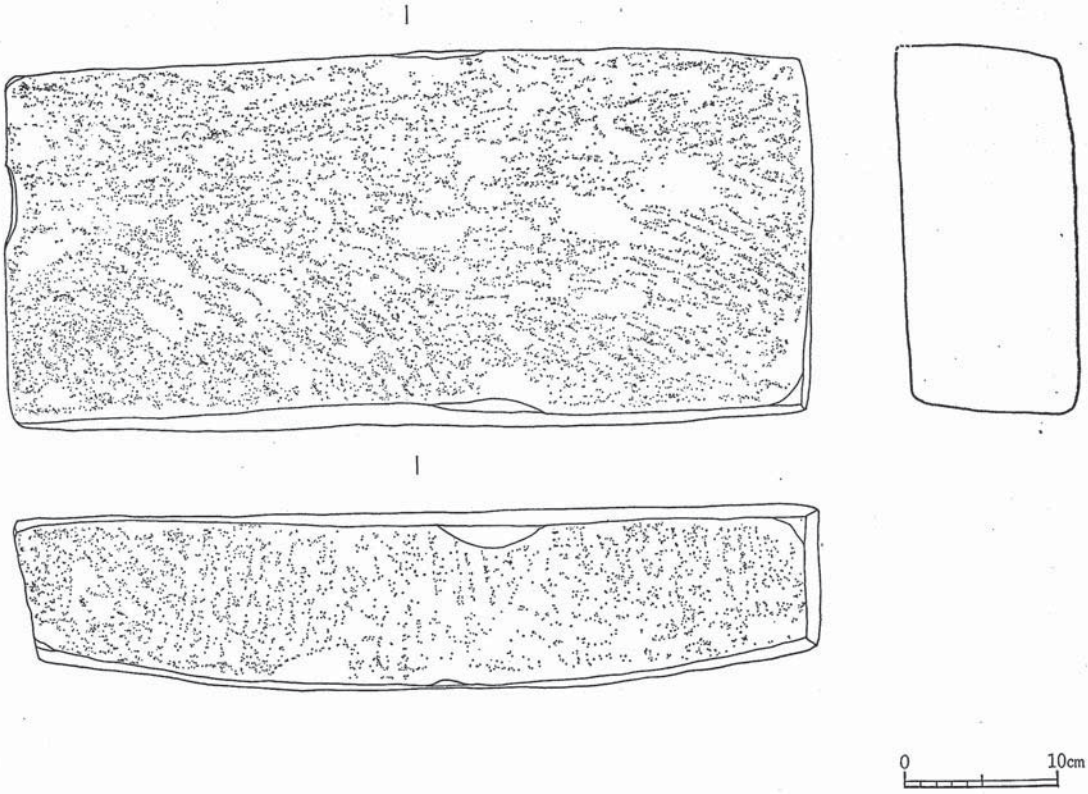
墳頂平坦部の現状は、楕円形に変形し、東西16m、南北12mあり、中央は50cmほど高くなる。墳丘の南北主軸に添って長方形近く上面で長さ9.86m、約10m、幅南側7.08m、北側6.46m、約7mで、逆台形に掘り込まれ、床面長さ8.65m、幅南側5.57m、北側5.26mあり、墓壙斜面の傾斜は50°～70°をなし、深さは1.5m～1.7mある。仮に第１次墓壙としたものである。その墓壙床面の周りを残し、中央に長さ6.93m、幅南側4m、北側4.01mを逆台形に掘り下げ、斜面傾斜が70°、深さは1.5m～1.7mほどある。第２次墓壙で、この中に小さめな砂利、小さめな礫、拳大の礫をしき、板石をのせ、さらに粘土をおいて石棺を据え、石棺の周りに割石を持送式に小口積みにしている。天井石は７枚で、南端の１枚は石室にかからないが、他の６枚と続いておかれる。天井石上はややつぶされた蒲鉾形に粘土被覆がひろがり、その南端に板状割石１個が直立した形にあった。割石は第１次墓壙の残された床面の高さまで積んである。

前期的な竪穴式石室で、石棺の基底部に排水、排湿が工夫されている。

内部主体の基底部の型式で、粘土床下に板石があり、その板石下に礫石のある滋賀県安土瓢箪山古墳の基底部の例は、礫石と板石を使い、その上に粘土床をおいた点で注意をひく。[7]

向野田の場合、基底部の調査は石棺南端長さ１mほどを棺身中央へ掘り込んだものであった。保存のため基底部の一部調査であって、排水溝の有無は分からなかった。構造の用意からみて排水溝はなかったのではないかと思われる。

この基底部調査の折、割石積み中に凝灰岩の石枕とみられる石材１個が出土した。この石材



第30図　　枕　石　未　製　品

には頭部の彫り込みなどみられず、未完成のものとみられる。被葬者2体分のためのものであったかどうか、2体の場合とすれば、北側に1個、南側に1個おくほかしかなく、竪穴式石室の伝統から、石棺としても1体分の石枕をととのえ、捨てられたものと思われる。

竪穴式石室の構造について、小林行雄博士は三つの群に分けられたことがある。[8]（註、次の表は筆者がまとめたもの）

第 12 表　　竪穴式石室分類表 (1)

	石室長	石室幅	石室高さ	備考
A	1.5～3.5m	0.5～0.9m	0.5～0.9m	底部に砂・小石・板石しく。
B	5 ～8 m	1 m前後	1 ～1.5m	割竹形木棺を含むものがある。狭長な石室。
C	2.7～6 m	1.5～2.5m	1.2～2 m	石棺がある。矩形化した石室。

向野田古墳の石室は長さ・幅および高さの数値は3群のうち、B群に当たるものであるけれど、石棺のある点でC群にかかわる。A・B両群石室の年代は近くにあり、C群は木棺を石棺にかえた後に生じた石室で、石棺の関係から生じた形式とされる。向野田古墳はB群の石室例であり、内部に石棺がある点で、C群へのつながりが考えられ、前期的であけるけれど、より下る年代にかかることが思われる。

最近、この竪穴式石室の分類方法から、割竹形木棺、粘土床、舟形石棺、複数屍床また箱式石棺などの内蔵、その他から県内の竪穴式石室をA～E類に分類された三島格氏らの研究がある。[9]（註、次の表は筆者がまとめたもの）

第 13 表　　竪穴式石室分類表 (2)

	石室長	石室幅	特色	該当古墳名
A	約5～6m	1m前後	割竹形木棺を収めたもの。	弁天山古墳、迫の上古墳、4世紀代。
B	4.5m前後	1.3m前後	長さは短かいが幅は大きくなる。	竜王山古墳、粘土床が遺存、4世紀後半～5世紀初。大鼠蔵楠木山古墳、やや時代の下降するもの。
C	3.5～4.5m	1m前後	舟形石棺を内蔵。	向野田古墳、大王山古墳（石棺の法量で石室長に差）5世紀前半。
D	3 m	2.3m	方形に近い長方形プラン。	別当塚古墳、2区の屍床、5世紀後半。小鼠蔵1号墳、箱式石棺を内蔵。
E	2m前後	1m前後	小型のもの。E類の一部はC類と並存。	成合津2号墳、長目塚前方部石室、丸尾7号墳、瀬崎古墳、通詞島東古墳。成合津と通詞島東は箱式石棺内蔵。成合津2号墳は5世紀後半、長目塚前方部石室・丸尾7号は5世紀前半。

なお熊本県では5世紀末～6世紀初には竪穴式石室の姿は消え、他の墓制に転換していくものとされる。そこでは、向野田古墳を5世紀前半に比定されていることが注意される。

上述の研究から3年前、福岡県を中心に竪穴式石室の形態を三大別された研究と、その後九州に於ける竪穴式石室を三類別された研究があり[10]、いま手許にある後者の後告による。（註、次の表は筆者がまとめたもの）

第14表　　竪穴式石室分類表(3)

	石室構造	特色	該当する古墳
Ⅰ	扁平割石小口積みの畿内型	三角縁神獣鏡を中心として鏡のあるのが多く、玉類・刀剣を主とする武器類を伴なう。大和政権とかかわる首長墓の性格が窺われる。	福岡県、石塚山古墳・銚子塚古墳・沖出古墳。 熊本県、弁天山古墳（以上4世紀代） 福岡県、月の岡古墳。 佐賀県、谷口古墳。 熊本県、向野田古墳（以上5世紀代）
Ⅱ	畿内型を受容し、伝統的墓制を脱した塊石積みの竪穴式石室	竪穴式石室（Ⅰ類）の拡充、円墳が多く、石室内法は縮少する。またⅡ類の前提には箱式石棺が多くみられる。Ⅰ類の系譜をもちながら畿内文化として舟型・長持石棺の導入（月の岡、谷口、向野田）、竪穴系横口式石室（老司）、九州型石棺（石人山、船山）などがあらわれる。	福岡市、今宿2号墳・持田ケ浦2号墳・粕屋郡七夕池古墳（以上5世紀代） 福岡市、老司古墳。 福岡県、石人山古墳。 熊本県、船山古墳（以上5世紀代）
Ⅲ	箱式石棺を母胎に竪穴式石室を導入した石棺系石室	箱式石棺の伝統的墓制の古さが残る。副葬品が貧弱、鉄製農工具・刀剣・鉄鏃が中心で、鏡玉類はほとんどない。古墳の群集性が強い。また控積みをもち、大型の天井石の石室化の傾向があり（栗崎山4号、石亀城、荒田比）、年代が降る。	福岡県、東宮ノ尾古墳群・片山古墳群。炭焼古墳群・栗崎山4号墳・石亀城古墳・荒田比石棺・こうしんのう5号墳（以上5世紀代）

大和政権と氏姓制的身分秩序関係から、在地首長層、その象徴とみられる筑紫君・肥君、また配下の共同体的首長と古墳のかかわりを指摘されている。

以上3表のまとめについて不十分の点は御寛恕を請う。

向野田古墳が、小林博士の3群分類のうち、B、C両群にかかわることはすでに述べた。三島格氏らの熊本県内の例から分類されたA～E類のうちでは、とくに一項目としてC類を立てられている。また山中氏の九州内の例から示されたⅠ～Ⅲ類の分類では、Ⅰ類におかれ、内容的にはⅡ類の特色として舟形石棺が注目されている。

以上先学の指摘により、向野田古墳が舟形石棺をもつ竪穴式石室として、石室変遷過程における編年的位置づけがほぼ明らかにされたことは重要であると思われる。

なお、内部主体は異なるけれど、向野田古墳の場合、奈良県東大寺山古墳その他と同じく二段墓壙をなしていることが明らかになった。東大寺山古墳の例について、古代中国の墓壙にこのような構造をしのばせるもののあることは興味がある。向野田の場合、大陸に近い中九州西海岸にあることが注目され、今後の追究が望まれる。また向野田がながく処女墳であったのは、この二段墓壙の深さに埋納されていたこととかかわりがあるのではないかと思われる。

3. 石　棺

向野田古墳の舟形石棺は、いわゆる典型的な舟形石棺でないことは先に記した。棺蓋が舟形で、棺身は箱形、その底部は箱形の周りに台状の平縁部をそなえている。棺身のそうした形はどこから工夫されたものかは興味がある。

刳抜式石棺について割竹形石棺→舟形石棺→家形石棺という展開の単線形図式も考えられるけれど、向野田の舟形石棺の一例をみても、そこに箱式棺の伝統が窮われるようである。

刳抜式の場合、棺材として阿蘇凝灰岩のもつ役割は九州においては決定的とみられる。また刳抜のため適当な石工用具が用意された段階でなくてはならない。

肥後の舟形石棺について、玉名郡に中心があることが指摘され、その形式を3分類された研究がある。[11]

A式……舟縁を有せず、枕付、尻細りの平面形を有す。

B式……舟縁を有し、枕付、尻細り。

C式……退化形式の舟縁を有し、枕なし、平面形は矩形だが胴太りのものもある。

共通点は棺身の断面が矩形でなく、丸味を帯びる刳抜式のものである点。蓋を有するものは皆家形だが、全般を察し得ないとある。

向野田の舟形石棺にも、棺身の箱形をのぞけば、B式のおもかげが残されているように思われる。蓋が家型というのも注目される。向野田の場合も，棺蓋断面は扁円形というより家形に近いところがある。

向野田の舟形石棺について、先学は九州的な舟形石棺の系譜の中におかれている。[12]

向野田古墳から図上直線距離約25㎞南方に八代市宮原町早尾の標高約20ｍの丘陵上に大王山古墳がある。はるか不知火海に面している。大王山古墳北方2キロの丘陵上に野津古墳群があり、南方丘陵に岡谷川などの古墳群が続いている。大王山古墳は、円墳とみられるが、現在封土は失なわれ、竪穴式石室の残骸の中に舟形石棺が露出していた。石室の大きさは、報告によると、長さ3.60ｍ・幅1.15ｍあり、棺蓋は半ば欠損し、棺身の大きさは長さ3.04ｍ・頭部幅88㎝・中央部幅90㎝・尾部幅88㎝ある。[13]

この大王山の舟形石棺出土の状態は、見たところ、向野田古墳の竪穴式石室を開いた時の舟

形石棺の状態ときわめて類似していることであった。

阿蘇熔岩の刳抜式で、棺蓋の一端に縄掛突起があり、棺蓋の舟縁状の平縁部に長方形の孔がつき、棺身に石枕が設けられていた。棺身の舟縁状の平縁部下方は埋まってみえない。外見上、そこまでは向野田古墳とほぼ似ている。こうした石棺製作上の類似は、石棺工人の問題を考えれば、工人集団の間になんらかの形で石室・石棺の図式が伝えられたものか、または工人集団のうちに工人の移動によりその図式が知られたものか、さらにその図式が独立に考案されたものかなどいろいろの径路が臆測される。距離的にそう遠くはなく、独立に考案されたというより、なんらかのかかわりが考えられるようである。

問題は、両者の舟形石棺が棺身底部の調査で、大王山は舟形で地山に直接埋められており、向野田の場合は棺身基底部の構造が舟形ではなく、小さめな砂利、小さめな礫、拳大の礫をしき、板石をのせ、さらにその上に粘土をおいて石棺を据えていたことである。

佐賀市熊本山古墳の舟形石棺は全長4.3 m、その石棺を一見して驚き、密柑畑の熊本山をたずねたことがある。墳丘はほとんど跡形もなくなっていた。報告によると、熊本山の舟形石棺は石室もなく、直接地山に埋められていた。そして棺身底部は舟形を呈している。石棺の長大さは、その内部が主室の前後に副室がおかれたこととかかわりのあることが指摘されている。⑭

鹿本郡大塚古墳は二段封土の円墳で、下段の頂に舟形石棺1基、長持形石棺1基が東西に並べ葬られていた。その破砕した舟形石棺の復原棺身の長さ約4 mで、両端に40cmの大きな縄掛突起があった。その石棺の辺から碧玉製石釧片が出土した。⑮

向野田の舟形石棺は、棺蓋で現存の縄掛突起を含め、長さ4 m、棺身では長さ3.95 mであり、棺蓋の縄掛突起を復原すれば、棺蓋の長さは4.20cm以上となろう。

向野田の場合、広い二段墓壙、丁寧な割石小口積み竪穴式石室の構想から、はじめ石棺は舟形が考えられ、棺蓋は舟形近く作られたのに、のち棺身基底部の構造に対応して棺身の方は箱形・台状の平底がとられることになったのではないかと考えられる。平底としても棺底は両側から中央底部へかけ比高3 cmほど傾斜している。舟形の名残りであろうか。

京都府八幡町茶臼山古墳は径18 m以上の円墳で埴輪がめぐり、竪穴式石室に割竹形に近い長さ2.88 mの舟形石棺を納めていた。⑯棺身の箱形の周りに舟縁状の狭い平縁部がめぐり、大王山古墳の棺身に似たところがある。向野田の場合、舟縁状平縁部の舟形棺底が基底部の構造に対応してカットされたとみられる。

第 15 表　　関　連　石　棺

番号	古墳名	所在地	墳形・規模		石棺長	幅 頭側	幅 足側
1	向野田古墳	熊本県宇土市松山町字向野田	前方後円墳 88.5m	蓋	400(345)推420	100	87
				身	380	106	90
石棺蓋石の小口に穿孔があり、環状をなすもの							
2	熊本山石棺	佐賀県佐賀市久保泉町川久保	円墳 約30m	蓋	430	88	
				身	430	88	
3	備前丸山古墳	岡山県備前市畠田丸山	円墳 約50m	蓋	394(342)	94	
				身	375(348)	90	
4	竜野高校在	兵庫県揖保郡御津町中島		蓋	推350(294)	110	80
石棺の全長が縄掛突起を含めて3mをこえる長大な割竹形・舟形石棺							
5	辻古墳1号棺	熊本県山鹿市方保田	円墳 30m	蓋	344	88	75
				身	370	78	72
6	津袋大塚古墳	熊本県鹿本郡鹿本町	円墳		推480(400)		
7	吉野古墳	宮崎県延岡市吉野町吉野	円墳 22m	蓋	303	75	
				身			
8	石舟天神社在	香川県綾歌郡国分寺町山内	(出土古墳不明)	身	364(310)	90	72
9	三谷丸山古墳	香川県高松市三谷町	前方後円墳 約90m	身	300(275)	76	64
10	快天山古墳1号棺	香川県綾歌郡綾歌町	前方後円墳 約100m	蓋	290(253)	79	
				身	300(252)	72 77	74
石棺長辺に穿孔を有するもの、あるいは長辺の突起が環状をなす舟形石棺							
11	大王山3号墳	熊本県八代郡宮原町早尾字腹巻田	円墳	蓋		102	
				身	304	95	95
12	室の山1号棺	熊本県八代郡宮原町今字室		蓋	252	63	
				身	248	63	
13	室の山2号棺	熊本県八代郡宮原町今字室		蓋	265(260)	78	
				身	262	78	77
14	北川石棺	熊本県八代郡竜北町大野		蓋	204	78	76
				身	210	77	75
15	もと大野貝塚付近	熊本県八代郡竜北町		蓋			

一　覧　表

縁辺突帯	石枕	縄掛突起 小口	縄掛突起 長辺	穿孔	石材	備考	註
あり(長辺)	あり(はめこみ)	各1(環状—水平穿孔)	—	長辺に各3(矩形)	阿蘇凝灰岩	竪穴式石室内	本書
あり(四周—棺台状)		—	—				
あり(長辺)		—	—	長辺に各2 小口に各1	阿蘇凝灰岩	石棺内部を3区に仕切る。穿孔は楕円形。	①
あり(長辺)	あり	—	—	小口に各1			
あり(長辺)		各1(環状—垂直穿孔)	—	—	火山石	竪穴式石室内。石室蓋石に穿孔あり。石棺蓋石に家の浮彫あり。棺身箱形	②・③
—		1(頭側)	2(片側のみ)	—			
あり(四周)		各1(環状—垂直穿孔)	—	—	阿蘇凝灰岩		③
あり(長辺)		各1	—	—	阿蘇凝灰岩		④
あり(長辺)		各1	—	—			
		各1			阿蘇凝灰岩	破砕	⑤
		各1	—		凝灰岩		⑥
		—	—				
—	あり	各1	—	—	鷲の山石		③
あり(長辺)	あり	1(足側)	—	—	鷲の山石		③
—		各1	—	—	鷲の山石	竪穴状石室内	⑦
—	あり	各1	—	—			
あり(長辺)		各1	—	長辺に各3(推)	阿蘇凝灰岩	竪穴式石室内・蓋に浅く段状にくりとった区画	⑧
あり(長辺)	あり	—	—	—			
—		—	各3(環状)	—	凝灰岩		⑨
—		—	—	—			
あり(長辺)		1(足側)	各3(環状)	—	阿蘇凝灰岩		⑩
あり(長辺)	あり	—	—	—			
—		—	各2(環状)	—	阿蘇凝灰岩		⑪
—	—	—	—	—			
あり		—	各2?(環状)	—		内側に亀甲様の区画	⑫

番号	古墳名	所在地	墳形・規模		石棺長	幅	
						頭側	足側
16	八幡茶臼山古墳	京都府綴喜郡八幡町八幡荘字笹ヶ谷	前方後方墳 50m	蓋	310(288)	105	69
				身	304(286)	97	63
長辺の突起が環状をなす家形石棺							
17	晩免古墳	熊本県宇土市立岡町字晩免	円墳	蓋	210	108	
				身	内法180	内法75	
18	潤野古墳	熊本県宇土市立岡町字潤野	円墳	蓋	240	114	
				身	222	75	
19	石の室古墳	熊本県下益城郡城南町塚原	円墳 推30m	蓋	300	210	
				身	内法235	内法155	
20	西限古墳	佐賀県佐賀市金立町西限	円墳 40m	蓋	200	110	
				身			
21	石樫山古墳	福岡県久留米市高良内町	前方後円墳 100～115m	蓋	285(273)	150	127
				身	250	162	158
22	浦山古墳	福岡県久留米市上津町二軒茶屋	前方後円墳 60m	蓋	198	106	
				身	内法186	内法79	
23	大谷古墳	和歌山県和歌山市	前方後円墳 70m	蓋	295	160	150
				身	内法210	内法98	
環状はなさないが上記家形石棺と似た形状の縄掛突起を有するもの							
24	神ノ山1号墳	熊本県宇土市松山町	円墳	蓋	217	106	96
				身			
25	西潤野古墳	熊本県宇土市立岡町字西潤野	円墳	蓋	208	87	
26	目尾古墳	福岡県飯塚市目尾		蓋			
				身			
竪穴式石室に舟形石棺・割竹形石棺を内蔵するもの(前出の石棺は除く)							
27	太尾古墳	熊本県八代郡竜北町大野字太尾	円墳				
28	唐仁大塚古墳	鹿児島県肝属郡東串良町唐仁	前方後円墳 120m	蓋	268	84	63
				身			
29	岩崎山4号墳	香川県大川郡津田町相地	前方後円墳 50m	身	236	76	68

縁辺突帯	石枕	縄掛突起 小口	縄掛突起 長辺	穿孔	石材	備考	註
—		各1	—	—	阿蘇凝灰岩	竪穴式石室内（二段墓壙）。穿孔は矩形。	⑬
あり（四周）		—	—	小口に各2（長方形）長辺に各4（長方形）			
あり（四周）		各1	各3（環状）	—	凝灰岩	棺身組みあわせ。棺身小口・長辺の内壁に各一対の刀掛突起あり。装飾あり	⑭
—		—	—	—			
			各2（環状）	—		棺身組みあわせ。棺身長辺の内壁に一対の刀掛突起あり。装飾あり。	⑭
—		—	—	—			
あり（四周）		—	各2（環状）	—	阿蘇凝灰岩	棺蓋2枚組みあわせ。棺身組みあわせ。妻入横口式。棺身内壁に装飾あり	⑮
—		—	—	—			
あり（四周）		—	各2（環状）	—	阿蘇凝灰岩	棺身組みあわせ。妻入横口式。装飾あり。	⑯
—		—	—	—			
あり（四周）		2（後端部）	各3（環状）	—	阿蘇凝灰岩	棺身組みあわせ。妻入横口式	⑰
—		—	—	—			
あり（四周）		—	各2（環状）	—	阿蘇凝灰岩	棺身組みあわせ。妻入横口式。装飾あり。扉石に把手状の突起あり。	⑱
—	あり	—	—	—			
—		—	各4（環状）	—	阿蘇凝灰岩？	棺蓋2枚組みあわせ。棺身組みあわせ。底石あり	⑲
—		—	—	—			
あり（四周）		—	各3	—	阿蘇凝灰岩	棺身組みあわせ。棺身小口の内壁に一対の刀掛突起、それに剣が一振かかる。	⑳
—	—	—	—	—			
あり（四周）		各1	各3	—	阿蘇凝灰岩	石蓋土壙の蓋石	㉑
あり（四周）			各4？	—	阿蘇凝灰岩		㉒
						竪穴式石室内	㉓
		頭側1・足側2	—	—	硬質凝灰岩	竪穴式石室内 身は箱形	㉔
—		各2	—	—			
—	両端に各1	—	—	—	火山石	竪穴式石室内	③

番号	古墳名	所在地	墳形・規模		石棺長	幅	
						頭側	足側
30	丸山古墳	香川県観音寺市室本	円墳 20m	蓋			
				身	200	105	
31	快天山古墳2号棺	香川県綾歌郡綾歌町	前方後円墳 約100m	蓋	262	64	
				身	233	64	
32	新庄天神山古墳	岡山県邑久郡長船町服部	前方後円墳 127m	蓋			
				身	195以上	76	67
33	足羽山山頂古墳	福井県福井市足羽山	円墳 60m	蓋			
				身	206	71	60
34	三池平古墳	静岡県清水市庵原大字原	前方後円墳 67m	蓋	240	80	55
				身	227	91	70
35	愛宕塚古墳	群馬県群馬郡群馬町	前方後円墳 92m	身	235	124	

一覧表註

◎ 石棺計測値は原則として各報告書によった。その他実測図により計測したものや、メートル法になおしたものなどもあり、あくまでも概数である。

◎ 石棺長は縄掛突起を含むが、(　) 内にそれを含まない場合の数値もあげた。

◎ 表作成にあたり註にあげた以外に以下の文献を参照した。

間壁忠彦・葭子「石棺研究ノート(1)～(4)」倉敷考古館研究集報第9・10・11・12号、1974～1976

岩崎卓也「舟形石棺をめぐる二、三の問題」史潮新1号、1976

◎ 表作成にあたり、以下の方々の御教示を得た。記して謝意を表します。

上野辰男氏・東光彦氏・伊藤奎二氏・佐藤伸二氏・川西宏幸氏

① 木下之治、小田富士雄「熊本山船型石棺墓」佐賀県文化財報告書第16集、1967

② 梅原末治「備前和気郡鶴山丸山古墳」近畿地方古墳墓の調査　3、1938

③ 藤田憲司「讃岐（香川県）の石棺」倉敷考古館研究集報第12号、1976

④ 熊本県立鹿本高校所在

⑤ 坂本経堯「古墳文化」熊本県史　総説編、1965

⑥ 鳥居龍蔵『上代の日向延岡』、1935

⑦ 和田正夫・松浦正一「快天山古墳発掘調査報告書」（香川県）史跡名勝天然記念物調査報告第15、1951

⑧ 乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」日本考古学年報11、1962

⑨ 末永雅雄・小林行雄『本山考古室圖録解説』岡書院、1934。大阪市立美術館蔵

⑩ 佐藤伸二『室山古墳調査報告書』宮原町教育委員会、1976

縁辺突帯	石枕	縄掛突起		穿孔	石材	備考	註
		小口	長辺				
あり(四周)		各2	—	—	阿蘇凝灰岩	竪穴式石室内	③
あり(四周)		各2	—	—			
—		各1	—	—	鷲の山石	竪穴状石室内	⑦
—	あり	—	—	—			
—					不明(枕石は砂岩)	竪穴式石室内	
—	あり(はめこみ)	—					
—		各1	—		笏谷石	竪穴式石室内	㉕
—	あり	—	—	—			
—		—	—	—	安山岩	竪穴式石室内 身の断面は矩形	㉖
—	—	—	—	—			
—		—	各2？	—		竪穴式石室内 箱形に近い家形石棺？	㉗

⑪ 熊本県文化課上野辰男氏の御厚意により、拝見した実測図による。

⑫ E.Sモース著　石川欣一訳「日本その日その日3」東洋文庫179、平凡社、1971

⑬ 堤圭三郎・高橋美久二「茶臼山古墳」（京都府）埋蔵文化財発掘調査概報（1969）、1969

⑭ 濱田・梅原・島田「肥後国宇土郡花園村の古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊、1919

⑮ 松本雅明編『城南町史』、1965

⑯ 佐賀市教育委員会『佐賀市金立町西隈古墳』、1975

⑰ 宮小路賀宏・渡辺正気・古賀寿「石樋山古墳」福岡県文化財調査報告書第41集、1968

⑱ 濱田耕作・梅原末治・島田貞彦「筑後国三井郡上津荒木村二軒茶屋の古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊、1919

⑲ 樋口隆康・西谷真治・小野山節『大谷古墳』和歌山市教育委員会、1956

⑳ 宇土高校社会部『宇土高校社会部報第2号』、1968

㉑ 富樫卯三郎「宇土市大字立岡西潤野古墳」ともしび第5号、1960

㉒ 佐田茂・高倉洋彰「九州の家形石棺」筑後古城山古墳、1972

㉓ 江上敏勝「熊本県八代地方の舟形石棺出土地一覧表」　竜北村史、1973

㉔ 上村俊雄「南九州における古墳文化の諸問題Ⅰ」鹿児島考古第7号、

㉕ 斉藤優『足羽山の古墳』福井市教育委員会、1960

㉖ 内藤晃・大塚初重『三池平古墳』庵原村教育委員会、1961

㉗ 後藤守一「上野愛宕塚」考古学雑誌第39巻第1号、1953

◎ 有孔棺蓋家形石棺に熊本楠原例（熊本史学31、1966）がある。竪穴式石室内舟形石棺に福岡倉永茶臼塚一号墳（同概報、1978）を追加。

4. 副　葬　品

出土遺物の副葬位置によって、その種類が異なり、また棺外と棺内では遺品の性格にかなり差のあることが注目される。

静岡県三池平古墳は、前方後円墳の竪穴式石室内で割竹形に近い刳抜式の石棺が直接土層の中に埋められた。棺内に遺骸に添えた玉類・腕飾類の装身具、棺外北側に四神鏡・筒形銅器・碧玉製品、南側に武器・農工具が主として副葬されていた。このような副葬品の棺内・棺外分納という方法は前期から中期にかけて行なわれ、さらに横穴式石室の後期にも続けられて、多くの類例がみとめられた。[17]

向野田古墳の場合、竪穴式石室内の舟形石棺で、棺外に主として武器、棺内被葬者をめぐって鏡のほか装身具が納められていた。棺外の武器は被葬者を守護する形に置かれ、また被葬者の生前所持したものとみられ、その勢威が示されている。

佐賀市熊本山古墳の長大な舟形石棺は、棺内が3区に彫られ、主室を中央に、副室が両側にある。副葬品は副室に入れられていた。

宇土市周辺で、筆者が亀崎古墳群と命名したその中の一基国越古墳は奥壁利用の石棺と東西両屍床の間にある別床内に鉄器類が見出された。

熊本山、国越などの例は、形は変わっても、箱式石棺の一端に設けられた別区とのつながりが指摘されている。[18]

向野田の場合、竪穴式石室の例として副葬品分納の典型的な例といえる。横穴式石室の国越の場合、別床はひとつで、石棺被葬者に属するか、また石棺・両屍床の被葬者共同のものか明らかでないところがある。

① 鏡　類

向野田古墳では、3面の鏡が一人の被葬者に納められていた。

宇土半島基部の周辺で出土した古鏡の数は少なく、それも一人の被葬者に1面の鏡が添えられていたにすぎない。発見順に記すと次の通りである。

a. 画文帯環状乳神獣鏡　径14.6cm（石棺内）、四獣鏡　径9.1cm（東屍床）、獣帯鏡径17.1cm（西屍床）。国越古墳、横穴式石室。

b. 三角縁四神四獣鏡　径21.7cm。城ノ越古墳、箱式石棺の疑いがある。

c. 鳥獣鏡　径10.5cm。チャン山（茶臼山）古墳、竪穴式石室内粘土床。

d. 方格規矩鏡　径18.4cm、内行花文鏡　径17cm、鳥獣鏡径11.2cm。向野田古墳、石棺内。

e. 獣形鏡　推定径15.5cm。西岡台遺跡千畳敷南側V字溝上層。[19] 古墳の存在不明。

向野田の場合、石枕の上で人骨頭部直上に内行花文鏡、石枕東側に鳥獣鏡が鏡背を上にして置かれ、石枕すぐ下で西側内壁に鏡面を表にして方格規矩鳥文鏡を立てかけていた。石枕の上に方格規矩鏡を置けば置けるゆとりがあるのに立てかけた点に、他の2面より重きをおかれた

鏡であったのだろうか。

方格規矩鏡はV字が開きすぎ、L字文は左向、T・Lの両側に尾を向けた鳥文はほぼ同形、銘文も明らかなこの鏡は、方格規矩四神鏡の分類によると、第九形式にあたるのではないかとみられる。中国出土の方格規矩四神鏡表2に長宜子孫内行花文鏡・方格規矩四神鏡各1面を出土した中国塼室墓の例があげられている。[20] 向野田は内行花文鏡のほかに、やや小形の鳥獣鏡1面がある。半肉彫りで、鳥と獣が交互にめぐる。この鏡と似た鳥獣鏡がチャン山(茶臼山)の鳥獣鏡で、同じ半肉彫りながら図像もすぐれ、鋳上りもよい。鳥獣は麟鳳とみて、麟鳳鏡とよんだことがある。

方格規矩鳥文鏡・内行花文鏡の2面は中国製、鳥獣鏡は仿製とみられる。半島基部周辺で3面の鏡を副葬された向野田の女性被葬者の地位はかなり重要なものがあったにちがいない。

② 玉　類

ガラス製の小玉、碧玉製の管玉、硬玉製の勾玉の3種類がある。被葬者をめぐる玉類の分散した在りかたから、その組合わせはむずかしいところもあるけれど、大体3つに分けられるのではないかと思うにいたった。

頭部から両肩上へかけ、小さめな管玉や小形勾玉がそれぞれ散っており、小形勾玉2個を根玉として約20個の小さめな管玉を一組としたものが考えられる。

管玉でなく、ガラス製小玉32個と小形勾玉2個の出土した宇土市古保里2号石棺がある。内部主体は異なるが、向野田の小さめな管玉と小形勾玉をみる上に参考となりはしないかと思う。一組とした場合、頸飾りとみられる。

次に上腕骨両外側に接して、それぞれ上腕骨に添った形の太めの管玉が一組として考えられる。その場合、左上腕骨内側にあった大きめの勾玉が根玉としてみられる。やはり頸飾り状のものとみられる。太めの管玉は約47個ある。

小玉の分散は、骨盤上方から下肢の方へのびていた。計133個のうち、両側骨盤外周りにとくに密集したものが目立ち、約70個を数え、ほかに大小8個所小玉の破砕した痕跡があった。東側骨盤外周りにあった小形勾玉は1個だが、根玉であったのではないかとみられる。小玉は首飾りともなるが、手にまかれたことも想像される。

着装のまま埋葬され、玉の緒が切れ、散った形が頭部から肩部へ、両上腕骨辺でみられるけれど、勾玉が4個とも尾が一様に南を指していて、小さな点だが、ややおかしいようである。小玉の散りかたは骨盤から下肢の方へかけてひろがっていた。このことは玉の緒が切れたとすれば、なにかの理由で流動したものではないかとも思われる。

石棺の石枕に頭部をのせた状態から被葬者は人骨化する以前に葬られたことはまちがいなく、玉類を着装していたとみられる。胸部内に玉類が1個もみられないのもおかしい点であるけれど、玉の緒が人骨化以前に切れたとすれば、上腕骨両側へ散ったことも想像されなくはない。

③ 車 輪 石

向野田の車輪石は、長さ10.2cm、卵形の、稜に刻線のある碧玉製の完形品で、古い形式のものに属する。

鹿本郡津袋大塚古墳[21]、沖の島17号遺跡、福岡市西区飯氏山古墳[22]などの車輪石は円形をなしている。嘉穂郡稲築町沖出古墳の車輪石がある[23]。

いくつかの車輪石を、図版などでわずか36個を見たにすぎないけれど、刻線などで次の4種類の形式がみられた。

1. 稜とくぼみにそれぞれ刻線のあるもの…19例
2. 稜のみに刻線があり、くぼみにないもの…3例
3. 稜に刻線がなく、くぼみにあるもの…1例
4. 稜とくぼみだけで、刻線のないもの…9例

1の場合、刻線の本数に多少の変化、また2線、3～4線が1組をなしたものなどがある。わずかの例で不十分であるけれど、刻線の10本以内のもの1例、10本代のは9例（変形を除く）、20本代のは7例、30本代のが1例ある。

車輪石は福島県から熊本県へわたり分布し、大阪・京都周辺に多い。卵形をA、円形をBとしてAは畿内を主とし、Bはかなり広く分布することが先学により指摘されている[24]。向野田の車輪石はAに属しながら、九州の中部西側にあることが注目される。このことは、城ノ越古墳の三角縁四神四獣鏡が複像式四神四獣鏡として同じ地域に出土していることが思い合わされ、興味がある。

第 16 表　　図版から見たいくつかの車輪石一覧

	名　称	所在地	長径 cm	外形	内孔	稜刻線	くぼみ刻線	稜だけのもの	石質色調	備　考
A 8	大師山古墳	大阪府河内長野市	20	卵	円	15	15		安山岩	表面に木目状の平行線がみえる
A 9	マンバイヘボソ塚古墳	兵庫県神戸市	8.4	円	円	21	21		濃緑色	裏面にも放射状の施文
A①	求女塚古墳	神戸市住吉町		卵	円	18	18			
A②	馬ノ山4号墳	鳥取県羽合町	10	卵	円	30	30			
A③	丸山古墳	徳島市上八分町		円	円	16	16			
A④	馬ノ山4号墳	鳥取県羽合町		円	円	13	13			
A⑤	銚子塚古墳	山梨県中道町		円	円	15	なし			
A⑥	〃	〃		円	円	19ヶ所変形	なし			2～3線一組で放射状に19個所ある
A⑦	馬ノ山4号墳	鳥取県羽合町		円	円	17	17			
B232	瓢箪山古墳	滋賀県安土町		卵	卵	16	16			
B114	石山古墳	三重県上野市	10	卵	円	28	28		碧玉	

	名　称	所在地	長径 cm	外形	内孔	稜刻線	くぼみ刻線	稜だけのもの	石質色調	備　考
B114	石山古墳	三重県上野市		卵	円	なし	なし	26		
B115	〃	〃	14.3	卵	卵	23	23		碧玉	
〃	〃	〃		卵	円	14 変形	14			稜にあたる所の刻線両側はほそく高まる
B116	〃	〃	15.4	卵	円	なし	なし	31	碧玉	
〃	〃	〃		円	円	なし	21	21		表面に木目状の平行線が目立つ
C8	〃	〃		卵	円	15	15			
D92の4	大師山古墳	大阪府河内長野市		円	円	23	23			
D92の5	〃	〃		卵	円	なし	なし	24		
E35	新沢千塚500号墳	奈良県橿原市	9.3	卵	円	なし	なし	28	碧玉	車輪石3個の中の1個
F4	紫金山古墳	大阪府茨木市	14.5	卵	円	27	なし		碧玉	刻線は稜のみにみえる
F7	東大寺山古墳	奈良県天理市	12.3	円	円	9 変形	9			稜の刻線両側はほそく高まる
〃	〃			円	円	なし	なし	17		
〃	〃			卵	円	なし	なし	16		
〃	〃			卵	円	なし	なし	20		
〃	〃			卵	円	なし	なし	27		
G258	東之宮古墳	愛知県	13.6	卵	円	14 3ヶ所変形	17			稜の刻線14本のほかに5線1組で上、左右に放射
G270	鶴山丸山古墳	岡山県	12.2	卵	円	26	26		濃青緑色	
〃	〃	〃		卵	円	なし	なし	22	青緑色	
G309	けんか谷古墳	京都府	12.3	卵	卵	16ヶ所変形	16			稜の刻線は2線1組で16個所木目状の平行線がみえる
H41	三池平古墳	静岡県	9	円	円	8ヶ所変形	なし		碧玉やや鼠色	割れて、両端の両側に2孔づつあけ、つないだとみられる。稜にあたる所に2線一組で8個所の凸襞をつける
I12 J37	沖ノ島遺跡	福岡県	約10	円	円	12	12		碧玉(凝灰岩)淡褐色	
I12 J36	〃	〃	約10	円	円	13ヶ所変形	なし		碧玉(頁岩)白緑色	3～4線一組で放射状に13個所にある
J60	飯氏山古墳	〃	約8.7	円	円	20 (推定)	なし (推定)			
K41	津袋大塚古墳	熊本県鹿本町	約10 (推定)	円 (推定)	円 (推定)	16 (推定)			碧玉	
L324	丸山古墳	徳島県		卵	円		なし			稜刻線か稜だけか、21本を数える
G312	丸山古墳	岡山県津山市下田邑	10.5	卵	卵				銅	車輪石形銅釧、放射状の太めの線の間に2～3本の細めの線がある

A日本原始美術6(1966)、B世界考古学大系3(1963)、C古墳時代の研究(1965年)、D新訂日本考古図鑑(1965)、E日本文化の歴史2(1969)、F古代史発掘6(1975)、G日本原始美術大系4(1977)、H三池平古墳(1961)、I宗像沖ノ島の遺宝(1978)、J続沖ノ島(1961)、K鹿本町史(1976)、L日本と世界史1(1977)

第 17 表　　車　輪　石　出

	府県	出土数	名称	所在地	墳形	埴輪	内部構造
1	熊本県	1	向野田古墳	宇土市松山町字向野田	前方後円	朝顔	竪穴式石室（舟形石棺）
2	〃	1	津袋大塚古墳	鹿本郡鹿本町津袋	円		舟形石棺
3	福岡県		沖ノ島5号遺跡	宗像郡大島町			半岩陰の祭祀遺跡
4	〃	2	沖ノ島17号遺跡	宗像郡大島町			巨岩上の祭祀遺跡
5	〃	1	沖ノ島18号遺跡？	宗像郡大島町			巨岩上の祭祀遺跡
6	〃	1	飯氏古墳	福岡市西区周船寺町	円		箱式石棺（推定）
7	〃	1	沖出古墳	嘉穂郡稲築町漆生字沖出	前方後円		竪穴系横口式石室
8	香川県	1	岩崎山4号墳	大川郡津田町相地	前方後円	円・家	竪穴式石室（舟形石棺）
9	徳島県	8＋α	星河内丸山古墳	徳山市星河内巽山	円	なし	竪穴式石室　？
10	岡山県	2	備前丸山古墳	備前市鶴山丸山	円	円・形	竪穴式石室（特殊な舟形石棺）
11	鳥取県	3	馬の山4号墳	東伯郡羽合町上橋津	前方後円	円・朝顔・家	竪穴式石室1のほか箱式石棺4・円筒棺2
12	兵庫県	1	求女塚古墳	神戸市東灘区住吉町呉田	前方後円		竪穴式石室のほか前方部に木棺
13	〃	1	万籟山古墳	宝塚市長尾山精華園	前方後円	円	竪穴式石室
14	〃	1	丸山1号墳	米上郡山南町	前方後円	なし	竪穴式石室3・箱式棺・木棺
15	大阪府		御神山古墳	豊中市螢ヶ池南町	前方後円		
16	〃		待兼山古墳	豊中市柴原	前方後円		
17	〃	1	紫金山古墳	茨木市宿久庄	前方後円	円	竪穴式石室
18	〃	3	弁天山C1号墳	高槻市服部	前方後円	円・形	竪穴式石室　1 粘土槨　2
19	〃		津堂城山古墳	藤井寺市美陵町	前方後円	円	竪穴式石棺（長持形石棺）
20	〃	16	大師山古墳	河内長野市三日市町字萩の前	円		木棺
21	〃		安威古墳群	茨木市安威神社裏山	円・19基		粘土槨 横穴式石室
22	〃		娯三堂古墳	池田市北新町	円		竪穴式石室
23	〃	1	黄金塚古墳	和泉市上代町	前方後円	円・家	粘土槨　3
24	〃		乳の岡古墳	堺市石津町	前方後円		長持形石棺
25	〃	1	久米田古墳	岸和田市	円		
26	〃		東ノ大塚古墳	柏原市国分町	円		
27	京都府	3	ケンカ谷古墳	京都市伏見区深草・鞍ケ谷			
28	〃	2	深草B号墳	京都市伏見区深草			
29	〃	6	百々ヶ池古墳	京都市右京区樫原町岡	円	円	竪穴式石室
30	〃		西車塚古墳	綴喜郡八幡町八幡	前方後円	円	竪穴式石室

土　地　名　表　(1979.1.現在)

副葬品	参考文献
鏡3・車輪石1・勾玉・管玉・小玉・貝輪・剣・刃・刀子・鉄斧	本書
車輪石片1・勾玉・管玉・小玉・剣	鹿本町史 1976
鍬形石・車輪石	沖ノ島Ⅰ、1970
鏡21・車輪石2・石釧1・剣・有樋鉄剣1・刀・蕨手刀子・硬玉製勾玉・碧玉製管玉・滑石製管玉・滑石製棗玉・ガラス小玉・滑石製小玉	続沖ノ島 1961
車輪石1・石釧5・勾玉・管玉・臼玉	
車輪石片1	続沖の島 1961
車輪石片1・石釧片1	
鏡1・車輪石片1・石釧4・勾玉・管玉・小玉・貝釧・刀・剣・斧・鎌・銅鏃	
鏡3・鍬形石4・車輪石8＋α・石釧4・刀	石井 1962
鏡31・車輪石2・勾玉・石製盤・石製合子・石製坩・石製器台・刀・剣・鏃・斧	近畿地方古墳墓の調査3 1938
(石室)鏡5・車輪石3・石釧12・勾玉・管玉・刀・剣・鉋・斧・鋸	山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ 1978
鏡8・車輪石1・刀	
鏡2・車輪石1・石釧4・管玉・十字形石製品・斧	近畿地方古墳墓の調査2 1937
(北石室)鏡1・車輪石1・ガラス小玉	丸山古墳群調査の概要 1977
鏡1・車輪石	
鏡1・鍬形石・車輪石・石釧	
鏡12・鍬形石6・車輪石1・勾玉・管玉・貝釧・刀・剣・斧・鉋・銛・短甲他	古代史発掘6 1975
(石室)鏡3・車輪石3・石釧4・合子・勾玉・管玉・筒形石製品・刀・銅鏃・工具など	弁天山古墳群の調査 1967
鏡9・車輪石片1・石製品(剣・刀子・鏃)・勾玉・管玉・棗玉・剣・刀・鉄鏃・銅鏃・巴形銅器ほか	
鏡1・鍬形石1・車輪石16・石釧13・管玉・鉄剣・刀子・紡錘車4	大阪史蹟名勝天然記念物調査報告3 1932
鍬形石・車輪石・石釧・須恵器(墳丘に土師壺)	
鏡1・車輪石・管玉・剣・刀・土師器	
(中央槨)鏡1・車輪石1・石釧1・勾玉・八角管玉・管玉・棗玉・臼玉・小玉・水晶製筒形品、(中央槨棺外)鏡1・刀・剣・刀子・斧・鎌・剣身型工具・小型工具	和泉黄金塚古墳 1954
鍬形石・車輪石	
車輪石1・石釧1	古代学研究83 1977
鏡片・鍬形石・車輪石・歯車形石製品	河内における古墳の調査 1964
鏡1・車輪石3・銅鏃	
鏡1・車輪石2・石釧4・紡錘車1	古代学研究57 1970
鏡8・車輪石6・石釧6・紡錘車・勾玉・管玉・刀	
鏡5・鍬形石・車輪石・石釧・玉類	

	府県	出土数	名称	所在地	墳形	埴輪	内部構造
31	京都府		興戸古墳	綴喜郡田辺町興戸	円	円・家	粘土槨
32	〃		平尾城山古墳	相楽郡山城町平尾山	前方後円	円・朝顔・家	竪穴式石室
33	〃	10	飯岡車塚古墳	綴喜郡田辺町草内	前方後円	円	竪穴式石室
34	〃	9	園部垣内古墳	船井郡園部町園部	前方後円	円・形	粘土槨
35	〃	2	カジヤ古墳	中郡峰山町	円	なし	竪穴式石室 外に3土壙
36	奈良県	4	北和城南古墳	(伝)奈良国立博物館			
37	〃	3	佐紀古墳群 日葉酸媛陵古墳	奈良市山陵町	前方後円	円・家・楯・蓋	竪穴式石室
38	〃	1	平城京北京 極大路地域	奈良市佐紀町君田			
39	〃		東大寺山古墳	天理市櫟本	前方後円	円・朝顔	粘土槨
40	〃	1	上殿古墳	天理市和爾町	円	円・家	粘土槨
41	〃	1	西山古墳	天理市杣之内町	前方後円	円・朝顔	
42	〃	10+α	櫛山古墳	天理市柳本	中円双方	円・家・楯・蓋	竪穴式石室 (長持形石棺)
43	〃	2	茶臼山古墳	桜井市外山	前方後円	壺形埴輪	竪穴式石室
44	〃	1	メスリ山古墳	桜井市高田	前方後円	特殊円・円・蓋	竪穴式石室 2
45	〃	1	池ノ内3号墳	桜井市磐余	前方後円	円	粘土槨
46	〃	3	新沢千塚 500号墳	橿原市川西町	前方後円	円・蓋	後円部粘土槨 くびれ部粘土槨 埴輪円筒棺 前方部粘土槨
47	〃		島ノ山古墳	磯城郡川西村唐院	前方後円	円	
48	〃	5	新山古墳	北葛城郡広陵町大塚	前方後方	円	竪穴式石室
49	〃	4	巣山古墳	北葛城郡広陵町三吉	前方後円	円・家・蓋	竪穴式石室 3
50	〃	2	葛城山	伝			
51	〃		オサカケ古墳	御所市柏原	前方後円?		粘土槨
52	滋賀県	1	瓢箪山古墳	蒲生郡安土町宮津	前方後円	円	竪穴式石室 3 前方部箱式石棺 2
53	三重県		志氏古墳	四日市市羽津町	前方後円		
54	〃	44	石山古墳	上野市才良	前方後円	円・朝顔・形象	粘土槨 3
55	〃	4	向山古墳	一志郡嬉野町下之庄	前方後方	円	粘土槨
56	〃		高取塚古墳	一志郡嬉野町天花寺	円		粘土槨 ?
57	〃	2	上野所在古墳	一志郡嬉野町	円		
58	岐阜県		親ケ谷古墳	不破郡垂井町平尾深谷	円		粘土槨
59	〃		陵山古墳	可児郡可児町伊香	円		

副　　葬　　品	参　考　文　献
鏡3・鍬形石・車輪石・石釧・管玉・刀・剣	山城に於ける古式古墳の調査　1955
鏡1・車輪石・石釧6以上・勾玉・管玉・臼玉・金銅環・鉄剣・土器	
鍬形石1・車輪石10・石釧42・勾玉・管玉・小玉・刀・剣・土器	近畿地方古墳墓の調査3　1938
鏡6・車輪石9・石釧3・刀・剣・斧・鏃・槍・銅鏃・短甲・木製刀・木製剣ほか	園部垣内古墳調査概報　1973
鏡1・鍬形石4・車輪石2・石釧2・管玉・筒形銅器・剣・刀子・のみ・鉇・鍬先・土師器	カジヤ古墳　1972
鏡4・鍬形石2・車輪石4・石釧2	
鏡7・鍬形石3・車輪石3・石釧1・石製品（イス・合子・高坏・臼・琴柱形）・勾玉・管玉	書陵部紀要第19号　1967
車輪石1	日本考古学年報24　1973
鍬形石・車輪石・石釧・玉・石製壺・巴形銅器・環頭付刀・剣・銅鏃・鉄鏃など	重要文化財28・考古Ⅰ　1976
鍬形石1・車輪石1・石釧2・筒形石製品・管玉・短甲・革褶・剣・ヤリ・鏃・斧・手斧・鍬・鎌・ノミ・刀子・鉇・銅鏃	和爾上殿古墳　1966
鏡片2・車輪石片1・石製鏃片・管玉・刀片・剣片	考古学雑誌第59巻第4号　1974
車輪石10＋α分・石釧9＋α分・玉・石製合子・後方部からも異形石製品・石製品・土製品(鍬形石形3・車輪石形2・石釧形1)剣・斧	櫛山古墳　1961
鏡24・鍬形石1・車輪石2・石釧1・玉杖・勾玉・管玉・ガラス玉・剣・銅鏃・鉄鏃	桜井茶臼山古墳　1961
(主室)鏡3以上・鍬形石2・車輪石片1・石釧15＋α・石製合子・石製椅子・勾玉・管玉・刀・剣(副室)銅鏃・鉄鏃・刀・剣・ヤリ・石製鏃・玉杖・工具	メスリ山古墳　1977
車輪石片1・刀・剣・鏃・斧・のみ	磐余池の内古墳群　1973
(主槨)勾玉・丸玉・小玉・管玉・琴柱形石製品 (副槨)鏡6・鍬形石1・車輪石3・石釧1・筒形銅器・異形銅器・車輪石形銅製品1・石製紡錘車・石製坩・石製錞・銅鏃・直刀・剣・刀子・槍・鉄鏃・鉾・短甲・鎌・斧・鉇・短冊形鉄斧	大和考古資料目録4　1975
車輪石	
鏡34・鍬形石1・車輪石5・石釧8・勾玉・管玉・刀・剣・金銅製帯金具・筒形石製品・石製刀子把・石製鏃・椅子形石製品・石製斧	佐味田及新山古墳研究　1921
鍬形石6・車輪石4・石釧・石製模造品・玉	奈良県に於ける指定史蹟1　1927
車輪石2	本山考古室目録　1934
鏡1・車輪石・玉類・琴柱形石製品・碧玉製合子・刀・剣	
(中央石室)鏡2・鍬形石1・車輪石1・石釧2・管玉・筒形銅器・銅鏃・鉄鏃・刀・剣・鉇・斧・鍬・短甲・刀子・鎌	滋賀県史蹟調査報告7　1938
鏡1・車輪石・勾玉・管玉	
(西棺)鏡1・鍬形石10・車輪石44・石釧13・玉類・石製模造品・紡錘車・琴柱形石製品13・刀・剣・鎌・鍬・鉇・ノミ・刀子・斧など	日本考古学年報3　1955
鏡4・車輪石4・石釧11・筒形石製品・刀	三重考古図録　1954
鏡2・鍬形石・車輪石・玉	
鍬形石2・車輪石2・管玉・コハク玉・碧玉製合子	三重考古図録　1954
鏡15・鍬形石・車輪石・石製合子・石製坩・石製盤・石製高坏・勾玉・管玉・小玉	
鏡2・鍬形石・車輪石・銅鏃・巴形銅器・琴柱形石製品	

	府県	出土数	名称	所在地	墳形	埴輪	内部構造
60	岐阜県		身隠白山古墳	可児郡可児町広見	前方後円		
61	〃		遊塚古墳	不破郡赤坂町提ヶ谷	前方後円	葺石 埴輪	粘土槨
62	福井県	1	小山谷古墳	福井市鬼武	円		舟形石棺
63	〃		河和田玉造遺跡	坂井郡坂井町河和田			玉造遺跡
64	石川県		片山津玉造遺跡	加賀市片山津本町			玉造遺跡 工房(住居)址約40
65	愛知県	1	東之宮古墳	犬山市北白山平	前方後方		竪穴式石室 木棺(前方部)
66	〃	1	瓢箪塚古墳	犬山市白山平	前方後方		竪穴式石室
67	静岡県		庚申塚古墳	磐田市陵田	前方後円		粘土槨
68	〃	1	三池平古墳	清水市庵原町	前方後円	壺・葺石	竪穴式石室 (舟形石棺)
69	山梨県	5	銚子塚古墳	東八代郡中道町粕	前方後円	円	竪穴式石室
70	長野県	1	将軍塚古墳	長野市篠ノ井川柳	前方後円	円	竪穴式石室
71	千葉県	1	手古塚古墳	木更津市小浜	前方後円		粘土槨
72	福島県		大槻古墳群	郡山市大槻町字堂山東	円・百数十基		切石積石室多し (壊滅)

註 ◎ 地名表作成にあたっては参考文献にあげたもの以外には下記の文献を参考とした。
日本の考古学Ⅳ（1966）、古墳時代の研究（1961）、前方後方墳（1974）日本における古鏡発見地名表（1976～1979）、東京国立博物館紀要8（1973）、新庄屋敷山古墳（1975）、古墳の航空大観（1975）。

◎ 校正中、車輪石を含めた石製腕飾類の出土地名表が『河内長野―大師山』関西大学文学部考古学研究第5冊、1977に掲載されていることを同書を入手して知った。しかし中上京子氏作成の同地名表は1974年現在のものでもあり、その後の例を本書では収録しており、若干の遺漏もあったが、それらは加えなかった。同書は石製腕飾類を網羅してあり、伴出遺物等も詳細であり、参照されたい。

副　　葬　　品	参　考　文　献
鏡・鍬形石・車輪石・石釧	
車輪石・石製模造品・銅鏃・鉄器類・須恵器	
鏡・鍬形石1・車輪石1・石釧2・勾玉・管玉・臼玉・刀	足羽山の古墳　1960
車輪石・紡錘車・管玉・丸玉・砥石製品および未製品	
車輪石(未)・石釧(未)・勾玉(未、製)・管玉(未、製)・鉄器・砥石・叩石	加賀片山津玉造遺跡の研究　1963
鏡11・鍬形石1・車輪石1・石釧3・勾玉・管玉・石製合子2・剣・刀・鏃・斧	日本原始美術大系6 1978
鏡11・鍬形石1・車輪石1・石釧3・合子2・勾玉・管玉・武器	
鏡1・車輪石・石釧	
鏡2・車輪石1・石釧1・石製品・筒形銅器・工具・農具・剣・刀・鏃	三池平古墳　1961
鏡5・車輪石5・石釧6・勾玉・管玉・刀・剣・斧・鏃・貝輪など	
鏡27・車輪石1・琴柱形石製品・勾玉・管玉・銅鏃・筒形銅器・金環・銀環・切子玉・小玉	川柳村将軍塚の研究 1929
鏡2・車輪石1・石釧2・紡錘車・玉・籠手・刀子・刀・剣・斧・銅鏃	
車輪石・玉類・金環・銀環・鈴環・鈴杏葉・銅鏃・桂甲片	

④ 貝　輪

向野田の女性被葬者の足先の方に20個ほどの貝輪片が置かれていた。日常生活に用いられ、死後埋葬にあたり威儀を示すものとして車輪石のみが添えられて、貝輪は足先の方へ納められたものであろう。

二枚貝がほとんどみられるけれど、腐蝕がいちじるしく、明らかでない。

宇土市周辺では、轟貝塚でサルボウ製などの貝輪が女性人骨に伴なっていた。[26]

最近みた北九州市立博物館の女性人骨着装の貝輪は遠賀郡岡垣町榎塚貝塚出土のものである。「九大解剖学教室永井昌文教授の鑑定では50代の女性です。左手に29個のタマキ貝の貝輪を嵌めております。後期（鐘ケ崎式期）のものです。おそらく特殊な身分を保証された女性でしょう。」とのご教示を小田富士雄主幹からいただいた。[26]

三島格氏の「貝をめぐる考古学」を読んで、[※] かって哈爾濱博物館でシャーマンの衣裳の背にタカラ貝がいっぱいつけられているのをみたことを思い出した。

貝輪着装人骨は女性が多く、その風習が弥生時代を通じ、古墳時代へ引きつがれている。向野田の場合、女性被葬者は或る時期に貝輪にかわる車輪石を入手したのであろう。

⑤ 鉄 器 類

長剣・短剣合わせて4本、直刀4本、刀子78本と鉄斧3個が棺外周りに納められていた。

棺外西側、被葬者の右側にあたる方に置かれた長剣は現存長1.18 mある。刃部の長さ1.08 m・身幅4.2 cm～4.9 cm・厚さ約1 cm、腐蝕した木柄の中の茎の長さ17.2 cmある。柄に対して剣身の長大なことが注目され、実戦用というより儀礼用のものではないかと思われる。

宮崎県下北方地下式横穴第5号の長剣は長さ1.07 m・刃長86cm・刃幅5.7 cm・厚さ0.5～0.8 cmある。長崎県諫早市小野古墳の横穴式石室の長剣は83.8cm・剣身長67.8cm・茎長16cmある。成川遺跡出土の75cm、若八幡古墳、片山11号墳、栗崎山4号墳、名子道遺跡1号墳などで50～62cmがある。そのほか九州では、30～45 cm程度、短剣の部類が多い。そうした鉄は4世紀末から6世紀中頃まで続いてみられ、5世紀の古墳に多く、6世紀には激減するという。[27]

向野田の長剣は柄尻になにか装着すれば、推定全長は1.20 m前後となろう。遅くとも5世紀には数えられよう。

短剣は棺外東側に残存長39.8cmと31cmの2本、西側36.3cmの1本と計3本ある。

東側の39.8cmの短剣の北へわずか離れ、棒状の残欠が図上にあり、もし短剣に続くものとすれば、この短剣はヤリ先であった可能性もある。西側の短剣は呑口式の木柄であった。

直刀は、棺外北側礫床上のは補修後の2個の直刀片は長さ50.8cm・25.3 cmで、計76.1 cmある。北側石棺平縁部上のは補修後の2個の直刀片は63.9 cm・27.4 cmで、2個の間の空白の長さ13cmを加えると長さ1.04 mはある。棺外東側のは補修後の長さ89.8cmある。また棺外西側のはほぼ完形のもので、現存長1.01 mある。

直刀4本のうち、1m以上のものが2本あり、その他もかなり長い。直刀では柄元につく倒卵形近い木質部が特徴としてあげられる。鉄剣ではあるが写真でみた京都府愛宕神社古墳や奈良県塚山古墳の鹿角製鉄剣の柄元では柄元装具の方が片側で長くのびた例があり[28]、向野田の柄元の倒ドングリ形の木質部が下方に垂れた形に似ている。こうした柄元刀装具をなんとよぶかであるが、切羽や鎺とはちがう。向野田のは、北側石棺平縁部上の例では補修後の長さ6.7cmをはかり、驚かされた。

なお剣はすべて糸の繁巻きで、刀はすべて平紐を巻いている。

刀子は78本が整理された。そのあと、もう1本シャーレに入れたものが出てきた。刀子をとり上げたあと、見つかった破砕したものであった。計79本となる。長さ数センチのが多く、長くて10cm余り、刃部と木柄の接着でやや斜めになり、刃先の部分を長く出して、使いやすいように工夫されている。

形も大きさもほぼ似ており、同じ工房で作られたのではないかとみられる。ナイフのような役目をしたものにちがいない。

埋葬にあたり、棺外周りに散った形で置かれていた。

向野田の刀子には布痕がほとんどついていた。布痕は1枚から6枚まで数えられ、2枚～3枚残存したものが多い。刀子を絹帛かなにかで包んだものとみられる。別表の通り、とくに棺外北側Nでは残存の重ねの枚数が目立った。Nの同じ場所なので、腐蝕はあったにしても、重ねの枚数は鄭重さのちがいを示すかもしれない。もしそうみられるとすれば、向野田の被葬者から分与された刀子があらためて供献されたのではないかと考えられる[29]。

鉄斧は長さ16.1cm、14.8cmと9.8cmの3個がある。

上部を両側から平たい楕円形に折り曲げ、袋式鉄斧のものであってかなり重い。竪穴式石室北側の礫床の東北隅に3個がまとまって納められていた。

宇土市周辺では国越古墳から、鉄斧8・雛形鉄斧3が鋤先・鎌などと出土した[30]。鉄斧は有肩式のもので、雛形のはずんどう形のものであった。

阿蘇長目塚の鉄斧は1個だけで、長さ16cm、袋部は矩形をなし、鋳造のものであった。「日本古典では斧が儀式用に使用されているので、この斧も墓室の守護を意味するものであろう。」という先学の見方がある[31]。

なお、鉄器として鉄鎌1個が前方部から出土している。ブルドーザーで採土の折、こわされて運ばれたという箱式石棺にあったものではないかと思われるけれど、明らかでない。

剣、刀、刀子や鉄斧についた布帛については関西大学角山幸博教授が鑑定されている。

⑥ 土 器 類

土器は、主なものは朝顔形円筒埴輪、前方部出土の壺形土器、後円部出土の壺形土器で、その他は小片であった。

向野田古墳の墳丘で出土した埴輪片は数量も多くなく、それらを整理して、口縁部では朝顔形とみられるものがあり、口縁の直立するものはなかった。将来さらに発掘を重ねるならば、或は円筒埴輪の出土が期待されるかもしれない。

朝顔形円筒埴輪として、三角形や長方形のスカシがつくとみられ、円形のスカシがない。円筒埴輪の編年によると、4世紀中頃～4世紀後半には三角形や長方形のスカシが行なわれ、5世紀後半へ及んでいる。

向野田の朝顔形口縁部にはく字形の外反するもの(A)と、逆にやや内反の形をとるもの(B)とに大別してふたつの傾向がみとめられる。

朝顔形頸部の1個は残存高10.6cm、下端近くに内彎し、上向き、先が円味のある突帯がめぐる。この突帯片だけ剝離したものも出土した。

埴輪肩部かとみられる円弧状の張りのある破片の1個は重弧文状の文様がつく。

円筒埴輪胴部は、その割れかたがタガに添った傾向がみとめられ、タガ間の幅13.7cm・15.7cmなどのものがある。松橋前田遺跡の朝顔形円筒埴輪[29]や国越古墳の円筒埴輪などのタガ間の幅10cm前後のものより広めである。向野田のタガは幅広く、突出が低く、ひらたい特色をそなえている。幅3.3cm～8.4cmまである。タガ上面の調整について、別表の通り、ハケメがなくヨコナデのもの（A）、ヨコハケの（B）、ヨコハケにナナメハケのかかるもの（C）、ナナメハケにナナメハケで格子状になるもの（D）、タタキのつくもの（E）、ナデ・オサエで、下方側端は調整がないもの（F）と分類した。

朝顔形円筒埴輪の基部4個があり、底部から逆Y字状に器壁の立ちあがるもの、外面だけ底部へややまるくなるものなどがある。その1個は淡赤褐色、明るく白みがかり、残存高19.2cm、復原径34.7cm、器壁の厚さ1.1cmある。後円部墳頂で墓壙東側の葺石の間に出土した。墳頂平坦部に朝顔形円筒埴輪が樹立されていたことを窺わせるものとして注目される。後円部南斜面のⅡトレンチー6m辺の所に出土したタガ幅の8.4cmの胴部片と色調、焼成がよく似ている。墳頂平坦部に埴輪方形列があったかどうか明らかでない。

なお向野田の朝顔形円筒埴輪には、黒斑のつくのが目立っている。黒斑のある埴輪は弥生式土器と大差ない焼成法による[30]。また弥生式土器のタタキ技法による伝統がみられ[31]、在地色のつよいことがあげられる。

朝顔形円筒埴輪として、胴部のタガひとつをとってみてもそれぞれ異なり、定型化していないところがある。工人が集団をなしていたとすれば、或る傾向が見出されるのではないかと思われる。集団をなしていたとしても、工人が別々に作ったことが想像される。ただひとつ共通した点は概してタガ幅の広いことであろう。向野田古墳被葬者の支配圏ではタガ幅の広いものが用いられたのであろうか。

鳥栖市岡寺古墳・久留米市釘崎2号墳の円筒埴輪最下段のタガはナデ、オサエでタガ上面は

まるく、また平らになり、円筒に密着していた。[28] 山鹿市チブサン古墳の円筒埴輪最下段のタガも似る。向野田の埴輪片の（F）はナデ、オサエで幅広い帯状となり、円筒を巻いている。岡寺・釘崎・チブサンと向野田はタガ幅のちがいはあっても、ともに器壁の補強からナデ、オサエしたものとみられる。後者はタガというより幅広い帯といってよいくらいのものになっている。向野田の幅広い帯状のタガは、いわゆるタガをナデ、オサエしたものから出てきたとすれば、幅広い形を説明することができるようである。

宇土市周辺では弁天山、擂鉢山の底部穿孔の壺形埴輪が見つかり、向野田で朝顔形円筒埴輪が出て、さらに国越・道免、最近発見の塚原平などの円筒埴輪、形象埴輪へと続いている。松橋前田遺跡の朝顔形円筒埴輪は地下に捨てられた形で埋没していたのを実見した。すぐ近くの松橋大塚古墳に使用されたものかどうか興味がある。

土器として後円部出土の上半が欠失した黄褐色の土師器は壺形埴輪の疑いはあったけれど、明らかでない。また前方部出土の淡紫褐色の短頸、胴長の壺形土器は内外両面にハケメがあり、薄手のものである。その口縁は二重口縁とみられる。供献の土器であることは間違いない。

前方部西側で葺石の間に出土した須恵器の提瓶片がある。墳丘が荒れて埋まったことは確かで、埴輪片のまじる葺石の間にあり、この1片の土器も無視してはならない。この須恵器は、宇土市周辺の須恵器の窯でつくられたものであろうか。須恵器の生産開始を、4世紀末とする説と5世紀中頃とする説があり、後者が新羅焼との関係から妥当という。[29] 上記の壺形土器とともに今後の問題点としておく。

5. 被　葬　者

チェーン・ブロックで棺蓋が開かれた時、離れてみたせいか、棺内被葬者の人骨が微妙な幾何学的な細い線条をなしているような錯覚にとらわれた。

長大な舟形石棺内の人骨はほぼ完形であった。

平面図ではかると、人骨の長さ1.45mある。調査者の九州産業医科大学北條暉幸教授（当時熊本大学第二解剖学教室助手）によると、身長150cm前後・肩幅32～33cm・年令30才代の後半から40才ぐらいまでの女性で、骨盤の部分などが決め手となった。人骨からみたところでは細くきゃしゃな女性であったという。

宇土市周辺で、筆者の発見した人骨で完形に近いものはわずか2例、城南町御領貝塚と宇土城本丸跡出土甕棺からであった。[30] 2体とも向野田のとともに、熊大解剖学教室に保管されている。

熊本県内で阿蘇長目塚古墳では、前方部竪穴式石室で板石の枕に仰臥伸展葬された1体は、8本の歯から年令35才ぐらいの女性であることが推定された。[31] 熊本市西部地区の高城山第3号古墳の封土内直葬の舟形石棺で、彫りだした石枕に仰臥伸展葬された1体はほぼ完形。30才未満の女性であった。[32] 城南町塚原古墳群の丸尾5号墳の組合せ箱式石棺は男女2体で、顔面を下

にした腹臥伸展葬の女性人骨は壮年と推定された。[40] 人骨の保存状態が悪かったという。

「葬法の変遷よりみた古墳の終末」に、[41] 同志社大学森浩一教授が古墳前期、中期の確実な例として、徳島市恵解山二号墳の組合式箱形石棺、岡山県久米郡柵原町月の輪古墳の南の粘土槨、神戸市得能山古墳の竪穴式石室などの女性遺骨例をあげられ、また男女2体合葬で、堺市野々井二本木山古墳の封土中直葬の舟形石棺、和歌山市東国山古墳群の第一号墳の後期初頭竪穴式石室、福井市足羽山古墳群竜ヶ岡古墳の古式の家形石棺、同古墳群宝石山古墳の舟形石棺などを示されている。二本木山ほかの3例はすべて男女各1体を合葬する。前期や中期古墳では完全な人骨が遺存した例は皆無に近いという。

なお森教授から、次のご教示をいただいた。「栃木、小山市桑57号墳（蛇行形鉄剣の出土地として有名）は、最近報告書をよむと女性でした。珍らしい例と思います。なかなか性別の分かるものが少なく、古墳の基礎資料は意外ととぼしいもので、にもかかわらず概論・定説だけが先行している気がします。」桑57号墳の人骨は歯牙4本から女性と判定された。[42]

「出土人骨の性別よりみた古墳時代社会の一考察」[43] に、間壁葭子氏は古墳出土人骨例を整理され、大体5世紀前後から6世紀前後の間に、21例の古墳中、主棺の主が男性の例12、女性が主1例、男女同棺5例、男性と幼児同棺が1例、不明3例をあげられ、男性がその古墳の主であることが圧倒的に多く、わずか見られる女性主体の古墳も構造や遺物の面で同時期の他の男性主体の古墳より劣ることを指摘されている。

向野田古墳は、確実な女性単独埋葬例として、二段墓壙の竪穴式石室に長大な舟形石棺をそなえ、副葬品もかなりあり、男性主体の古墳に比較してまさるとも決して劣らないものであることがいえるようである。

向野田古墳は、宇土半島古墳群の中の1基であり、その変遷の過程において位置づけられなくてはならない。かつて「周辺の遺跡から見た西岡台」の中で、宇土半島基部前方後円墳群として、弁天山古墳→迫ノ上古墳→城ノ越古墳→向野田古墳→国越古墳→楢崎古墳→女夫塚古墳と編年の順を試みたことがある。[44] 今回は半壊のチャン山（茶白山）古墳をのぞく。

壺形埴輪を出土した擂鉢山古墳は半島基部の主墳といってよいものであるが、弁天山古墳との編年上の前後関係は発掘を待たなくてはならない。ほかに未調査の有明海に臨んだ天神山古墳、不知火海に面した松橋大塚古墳や半島狭隘地帯に控えた仁王塚古墳がある。なお本年新発見の向野田古墳近くの丘陵突端に前期的様相をそなえた御手水の前方後円墳がある。

竪穴式石室の弁天山・迫ノ上両古墳、三角縁四神四獣鏡出土の城ノ越古墳と横穴式石室の国越古墳の中間に向野田古墳をおくことはさして無理はないであろう。

九州の前期古墳で、玄海灘から周防灘へかけた北九州の場合、前期古墳は点在しているのに対し、宇土半島基部では集中している。最近発掘された西岡台遺跡は高地性集落跡として半島基部の古代的な重要性を裏付けるものとして注目される、西岡台の古墳時代のV字溝から二重

口縁の壺形土器その他が出土した。城南町沈目遺跡のものと同時期のものであることが指摘されている。[16]

向野田古墳の被葬者が半島基部周辺の支配的な首長であったことは墓壙、石室や石棺の構造から窺われる。また貝輪や車輪石をはめ、長剣を持した姿は、貝輪をはめた縄文人の伝統をうけつぎながら、中央勢力への服属はともかく、車輪石をもつことは畿内の風習とつながりのあることを示している。

2. ま と め

古墳の立地と周辺の遺跡

向野田古墳は熊本県宇土市松山町3993番地に、前方後円墳の後円部が残存している。前方部は採土のため失われてしまった。

雁回山南麓につづく丘陵の突端上にある向野田古墳は、その丘陵つづきと宇土半島中央を縦走する宇土山地が半島基部においてさし挟むV字状の平野の狭隘地帯にのぞんでいる。その地帯は熊本・八代を結ぶ重要なルートをなしている。

東から西方へ突出した宇土半島基部の北辺は緑川が有明海へ流れ、南辺は大野川が不知火海へ注ぐ。有明海側に轟・曾畑の貝塚、不知火海側に松橋大野貝塚がある。弥生時代の甕棺が境目・善導寺・宇土城跡や宮庄北平へ半島基部の中央をつらぬき、出土した。北九州の甕棺文化の影響が窺われる。古墳時代には12基の前方後円墳が半島基部周辺をめぐって築かれている。また半島基部の宇土山地をめぐり、舟の線刻のある装飾古墳が5個所にあり、古保里・境目には箱式石棺群などがある。

かつてたずねた京都郡苅田町石塚山古墳などは点在しているのに対し、宇土半島基部では丘陵の高みにあり、集中していることは古代西南日本のフロンティアとして注目に値する。

墳　丘

熊本・八代を結ぶ国道3号線すぐ近くの丘陵標高37m余の頂上で後円部を南に、前方部を北にした前方後円墳で、採土以前は雑木林に覆われていた。現在も後円部の東・南両斜面は雑木林となっている。

前方部切断の前方後円墳で、長い間に変形したところもあり、調査当時、墳丘西斜面はブルドーザーでかなり削られていた。全長86m・後円部径53.7m・前方部幅33.5m後円部は前方部より2m高い。八分比設計によると、日葉酢媛陵型に近いものがあり、前方部三段、後円部四段築成ではなかったかとみられる。

墳丘上に葺石があり、埴輪が立っていた。葺石は前方部西側、後円部の東・南・西各斜面で散乱した状態で発掘され、埴輪片がまじっていた。やや良好な個所は西斜面の登り路左手の一個所であった。埴輪は朝顔形で、円筒埴輪はなかったようである。後円部頂上の平坦部で葺石

にまじり、円筒の基部片が出土した。黒斑のある朝顔形円筒埴輪はすべてタガが幅広く、形がそれぞれかわり、定型化したところがみられない。宇土周辺で朝顔形円筒埴輪は向野田がはじめで、松橋前田遺跡の朝顔形円筒埴輪は地下に埋められていた。向野田古墳後円部斜面から壺形埴輪の疑いのある上半の欠けた土師器、前方部から短頸・胴長な壺形の土師器が出土している。後者の口縁は二重口縁とみられる。今後の検討で、土師器は編年の重要な手がかりとなろう。

墓壙・石室・石棺

後円部頂上の平坦部に南北長約10m、東西約7mの長方形で、逆台形に深さ1m半ほど掘り込み、さらに壙内の周り幅約70cmの平縁部を残し、1m半ほど掘って二段墓壙をなしていた。板状割石を竪穴式石室に小口積みし、周りの平縁部の高さまで積んでいる。石室内に4mの阿蘇凝灰岩の刳抜式舟形石棺を納めていた。棺蓋は舟形で両端に横孔のつく縄掛突起、両側に長方形の穿孔が3個づつあり、棺身は箱形で周りに狭い平縁部がめぐる。棺底は基底部の排水、排湿の仕組みがしてあった。蓋石は7枚あり、その上を粘土で覆っていた。墓壙内の東北隅に三段の踏み石がつけられている。

向野田の石室、石棺と似た例に八代郡大王山古墳があげられる。円墳とみられ、石棺はかなりいたんでいる。

副　葬　品

向野田古墳では副葬遺物は、棺外と棺内で区別されていた。棺外には剣・刀・刀子や鉄斧、棺内には石枕をした被葬者をめぐって鏡・玉類・車輪石や貝輪が納められていた。このような副葬品分納は他の古墳にもみられるけれど、向野田古墳は代表的な例といえる。

石室内・棺内は赤色顔料が塗られて、ことに被葬者の頭部辺はあざやかであった。頭部近く、内行花文鏡・鳥獣鏡が石枕上に、方格規矩鳥文鏡が西側内壁に立てかけてあった。大小の管玉・勾玉が頭部から上腕骨外側へ散り、多くの小玉が骨盤辺から下肢へ散っていた。車輪石は完形で、右手先の方にあり、貝輪は足の先の方へおかれていた。

長剣は現存長1.18cm、短剣は3本、刀子は79本を数える。直刀4本のうち3本に柄元の刀装具がつく。鏡をはじめ剣・刀・刀子や鉄斧に布痕があり、絹帛などで包んだものとみられる。

被葬者と古墳の編年

舟形石棺の石枕に仰臥伸展葬の人骨はほぼ完形に近いものであった。人骨片の残存は多いけれど、完形に近いものは数えるほどしかない。

向野田の場合、完形の人骨は女性であった。人骨の残ったことをみても、石棺をかこむ構造のすぐれていることが分かる。女性の身長150cm前後、肩幅32～33cm、年令は30才の後半から40才ぐらいまで、骨は細くきゃしゃな体格らしい。宇土半島基部にあり、周辺はもちろん海上活動を支配した首長級の人物であったことが、その厚葬から知られる。ただ副葬遺物からただ

ちにその性格を窺うことはむずかしい。それには文献や民俗学などの研究に待たなくてはならない。

「火の国」では考古学的所見に加え、文献などにより酋長的巫女とされ、最近は巫的女王と表現されている[46]。「古代史ノオト」では「火の国」の成果をふまえ、民俗学などから「不知火海の巫女」として探求がすすめられている[47]。向野田の被葬者は、祭司的首長の性格をもつものではなかったかと筆者は考える[48]。

向野田古墳が宇土半島基部前方後円墳群の中にあって、弁天山古墳、迫ノ上古墳、城ノ越古墳と国越古墳の間に編年されることはすでに述べたところである。

二段墓壙の竪穴式石室に舟形系の石棺があり、貝輪とともに古式の車輪石があり、舶載の漢式鏡に仿製鏡があり、長大な剣・短剣3本に4本の直刀、うち3本は柄元の刀装具がつく。朝顔形埴輪は定型化せず、スカシ孔は4世紀後半の要素をそなえ、タガ幅の広いことがあり、年代はやや下降することも考えられる。4世紀末から5世紀前半の頃には墳丘は築造されたとみられる[49]。

註 ① 宇土半島基部前方後円墳群編年順試案

② 富樫卯三郎「宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獣鏡」熊本史学第33号、1967。同「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」石人 №106、1968

③ 乙益重隆「宇土郡不知火町国越古墳」昭和41年埋蔵文化財緊急調査概報、熊本県教育委員会、1967

④ 小林行雄「倭の五王の時代」古墳文化論考、平凡社、1976

⑤ 富樫卯三郎ほか「宇土市の文化財第三集」、宇土市教育委員会、1977

⑥ 椚　国男『古墳の設計』築地書館、1975

⑦ 北野耕平「前期古墳における内部構造の問題」河内における古墳の調査、1964

⑧ 小林行雄「竪穴式石室構造考」古墳文化論考所収、平凡社、1976

⑨ 阿部・今井・山崎・西・松本・三島「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」熊本史学第50号記念特集号、1978

⑩ 山中英彦『東宮ノ尾古墳群―北九州市小倉北区東宮ノ尾所在石棺系石室の調査』、1974

⑪ 田辺哲夫「肥後の船型石棺に就て」昭和25年度秋季学術大会部会発表要旨、西日本史学第7号、1951

⑫ 間壁忠彦、間壁葭子「長持形石棺」倉敷考古館研究集報第11号、1975

⑬ 乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」日本考古学年報11、1962

⑭ 木下之治、小田富士雄「熊本山船型石棺墓」佐賀県文化財報告書第16集、1967

⑮ 富田紘一「通史（原始古代）」鹿本町史、1976

⑯ 堤圭三郎「茶臼山古墳―八幡丘陵地」埋蔵文化財発掘調査概報（1969）、京都府教育委員会、1969

⑰ 内藤晃、大塚初重「三池平古墳」庵原村教育委員会、1961

三池平古墳について、明治大学大塚初重教授から次のご教示をいただいた。

ご連絡のありました「三池平古墳」の報告書は昭和36年、「日本の考古学」は41年の刊行で5年の間があります。おそらく、36年当時は、石釧・帆立貝型石製品・筒形銅器をはじめ、仿製四神鏡などの示す様相が前期形式であっても、東国なるがゆえという意識で、表現として400年代まで降りうるとしたからだと思います。

41年段階では、土師器論なども多少進展し、私どもが考えていた以上に東国への古墳波及が早いことが判明しつつあったので、4世紀後半という表現をしたと思います。30年代には、関東の前期古墳は、誰もが5世紀前葉と表現していました。これほど当時の年代論にはあやふやな点があったということです。

⑱ 前掲書註③、註⑭

⑲ 原口・富樫・大田・平山・高木ほか「宇土城跡（西岡台）」宇土市教育委員会、1977

⑳ 山越茂「方格規矩四神鏡考」（中）考古学ジャーナル　№95、1974

㉑ 前掲書註⑮

㉒ 原田大六『続沖の島』宗像神社復興期成会、1961

㉓ 校正中に着く。車輪石について九州歴史資料館渡辺正気氏の私信。貝輪について田添夏喜氏の繁根木古墳（伝佐山古墳）のプリントなどとともに昭和53年10月。本書P57参照。

㉔ 小林行雄『女王国の出現』国民の歴史1、文英堂版、1967

㉕ 濱田耕作・榊原政職「肥後国宇土郡瀬村宮荘貝塚発掘報告」京都帝国大学文学部考古学研究報告第5冊、1920

㉖ 北九州市立歴史博物館小田富士雄主幹の私信による。昭和53年8月。

㉗ 野間・石川・茂山・田中「下北方地下横穴第5号」宮崎市文化財調査報告書第3集、1977
高野晋司「小野古墳の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報1、長崎県文化財調査報告第35集、1978

㉘ 大塚初重「大和政権の形成―武器武具の発達」世界考古学大系3、1963

㉙ 井上辰雄『火の国』学生社、1970。向野田の刀子を鉄生産に従事する集団からの供献とみられている。また註⑦前掲書　P185、群馬県白石稲荷山古墳の報告に、後藤守一博士は石製刀子の分類から、多人数により奉献されたとみるべき可能性を述べられている。なお、古代傷身哀悼の風習があったことを思い、それらの刀子が傷身に用いられたのち、供献されたとすれば、興味はあるが、決め手がない。

㉚ 前掲書註③。昭和53年12月末、宇土市上網田町の田平城跡の城2号墳（旧称塩屋2号墳）の調査で、小型鉄斧・琴柱形石製品2などが発見された。ご厚意により三島格氏らの調査を実見できた。昭和52年3月発見の装飾のあるチンカンさん古墳（小田良古墳）とともに、宇土半島の遺跡についてあらためて見直さなければならない。城2号墳は円墳、割石小口積み竪穴系横口式石室で床面は仕切り1枚が石室主軸に添ってあり、1枚は奥壁の方へとり上げられ、礫にまじり石灰藻がしかれていた。大矢野町の維和島の石棺の床面にはサンゴがしかれていたのを実見したことがある。

㉛ 坂本経堯「阿蘇長目塚」熊本県文化財調査報告第三集、1962

㉜ 伊藤奎二作成「松橋町前田遺跡出土埴輪実測図」、未発表

㉝ 川西宏幸「埴輪研究の課題」史林第56巻第4号、1973

㉞ 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」大阪文化誌第2巻第4号（通巻第8号）、1977

㉟ 川西宏幸「円筒埴輪総論」考古学雑誌第64巻第2号、1978。第1図円筒埴輪の技法、写真4、押圧技法（最下段タガ）、畿内および周辺における円筒埴輪の編年で、押圧技法はタガの端面を板状工具で押圧するという方法で第Ⅳ期にあらわれる。昭和53年12月、石橋新次・横尾義明・堤諭吉氏らのご好意により筑後考古学研究会の資料岡寺古墳・釘崎2号墳などの埴輪を実見することができた。

㊱ 吉田恵二「4須恵器」考古資料の見方<遺物編>、柏書房、1977

㊲ 富樫卯三郎「甕棺とその遺跡」宇土市の文化財第一集、1972

㊳ 前掲書註㉛

㊴ 東光彦「高城山遺跡群」熊本市西山地区文化財調査報告書、熊本市教育委員会、1969

㊵ 隈・野田・松本・島津・江本・緒方「塚原」熊本県文化財調査報告書第16集、1975

㊶ 森浩一「葬法の変遷よりみた古墳の終末」末永先生古稀記念古代学論叢、1967

㊷ 昭和53年12月、森浩一教授の私信による。
大和久震平「桑57号墳発掘調査報告」小山市教育委員会、（株）小山カントリー倶楽部、1972

㊸ 間壁葭子「出土人骨の性別よりみた古墳時代社会の一考察」（1962、7月稿）岡山史学

㊹ 富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」前掲書註⑲所収

㊺ 平山修一「千畳敷」前掲書註⑲所収

㊻ 前掲書註㉙

㊼ 谷川健一「古代史ノオト」大和書房、1975

㊽ 上田正昭「日本の女帝」講談社現代新書、1972
京都大学上田教授は、女帝史の上から三つの段階をあげておられる。第一が巫女王の段階で、向野田の被葬者はその段階の中に数えられ、古墳に埋葬されるものとして祭司的首長の色彩がみとめられるようである。

㊾ 土師器のことから「宇土城跡（西岡台）」（前掲書註㊺）の千畳敷の項をみたところ、西岡台遺跡の土師器が4世紀末～5世紀初頭に比定されている。向野田古墳の編年と考え合わせ、ふと西岡台の生活遺跡と向野田古墳とのかかわりが思い浮んできた。向野田古墳とかかわるかどうかは、今後の討究に待たなくてはならない。

補註

※ 三島格「貝をめぐる考古学―南島考古学の一視点」学生社、1977
特殊な貝が早くから宝器・呪物あるいは装飾品として使用されたことを説かれ、タカラガイの呪力・スイジガイの呪性その他について示されている。

第 18 表　　熊　本　県　内　前　方

No.	古墳名	所在地	墳丘の規模 (m)				
			全長	後円部径	前方部幅	後円部高	前方部高
1	三の宮古墳	荒尾市下井手字持田丸	37	23	19	6	2.3
2	院塚古墳	玉名郡岱明町開田字京塚	78	43	26	6	3
3	藤光寺古墳	玉名郡岱明町高道字大馬場	85	35	50	9	
4	稲荷山古墳	玉名市繁根木字宮中					
5	山下古墳	玉名市山部田字山下	59	36.5	16	6.5	3.5
6	徳丸1号墳	玉名市上小田字下徳丸					
7	塚坊主古墳	玉名郡菊水町江田字清原	47	38.5	25+α?		
8	虚空蔵塚古墳	玉名郡菊水町江田字清原	53?	33			
9	船山古墳	玉名郡菊水町江田字清原	61	40	40		
10	若宮古墳	玉名郡菊水町江田字中小路	30	20	7.5	5	
11	岩原双子塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原字塚原	102	57	48	8	7.1
12	チブサン古墳	山鹿市城字西福寺	44	23	16.5	7	6
13	竜王山古墳	山鹿市杉		20～25		4～5	
14	ひょうたん平古墳	山鹿市杉	(40)	(20)		(5)	
15	中村双子塚古墳	山鹿市中字双子塚	46	25	6(10)	2.5	4.5
16	神社裏古墳	山鹿市方保田字宮田					
17	亀塚古墳	山鹿市方保田字塚ノ本	83	37.7	17.3	1	3
18	清水山古墳	山鹿市方保田字日置					
19	蛇塚古墳	菊池郡七城町亀尾字蛇塚					
20	大塚古墳	菊池市長田字大塚					
21	フタツカサン古墳	菊池市木柑寺字下向原	41.8			5.4	4.5
22	高熊古墳	鹿本郡植木町古閑字平神平	61.5	33	15	4.5	1.5
23	横山古墳	鹿本郡植木町有泉字槍	39	15		4	
24	石川山2号墳	鹿本郡植木町石川字塚前	34	22	10	4	2
25	塚園古墳	鹿本郡植木町岩野字塚園		14		(4)	
26	上鞍掛A古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛	65.5	33.7	26.7	5.56	3.8
27	上鞍掛B古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛					
28	長目塚古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛	111.5	59.5	約30	9.2	約4
29	富ノ尾3号墳?	熊本市池田町富ノ尾	30	20	10	2.4	

後　円　墳　地　名　表

(1978.4.現在)

外部施設	内部主体の構造	出土遺物	文献
石人、円筒埴輪	横穴式石室(装飾)		①
周溝、排水施設、壺形埴輪	舟形石棺 4	画文帯神獣鏡、鉄剣、直刀、勾玉、管玉切子玉、ナツメ玉、ガラス小玉	②
			③
朝顔形埴輪			③
	後円部…舟形石棺1、壺棺2 前方部…舟形石棺 1	鉄斧、鉋、鉄鏃、鉄釧、鉄剣、	④
	舟形石棺		③
周溝、円筒・朝顔形・形象埴輪	横穴式石室(装飾)		⑤
周溝、円筒埴輪			⑤
周溝、円筒・朝顔形埴輪	横口式家形石棺	画文帯神獣鏡、画像鏡、獣形鏡、鉄刀、鉄剣鉄槍、鉄鏃、冠、沓、帯金具、耳飾他多数	⑤・⑥
	舟形石棺		⑦
周溝、葺石、円筒埴輪			⑧
周溝、石人、葺石、円筒埴輪	横穴式石室(装飾)		⑦・⑨
	竪穴式石室	刀子片	⑩
	竪穴式石室？		⑩
円筒埴輪			⑦
			③
		直刀等	⑦
	石棺？		
円筒・形象埴輪	横穴式石室？　前方部に箱式石棺	須恵器、杏葉	③・㉚
			③
石人？、円筒埴輪			⑦
円筒・朝顔形・形象埴輪			⑪
	横穴式石室(装飾)	直刀、馬具残欠、玉類、金環、須恵器	
			⑫
周溝			⑬
			⑬
周溝、壺形埴輪	前方部に竪穴式石室	内行花文鏡、勾玉、管玉、丸玉、小玉、鉄刀、刀子、鉄鏃、鉄斧、須恵器、土師器	⑭
円筒埴輪			①・㊼

No.	古墳名	所在地	墳丘の規標(m)				
			全長	後円部径	前方部幅	後円部高	前方部高
30	長塚古墳	上益城郡御船町久保	46.2	36.2	23.1		
31	今城大塚古墳	上益城郡御船町滝川字大塚					
32	甚九郎山古墳	下益城郡城南町沈目字奥野	36.9	21	15	4.5	4
33	狐塚古墳	下益城郡城南町陳内字狐塚	23	10.5	8.5	4	3.5
34	花見塚古墳	下益城郡城南町塚原字北原	33(42)	12.5(25)		3	
35	土取塚古墳 ?	下益城郡城南町塚原字丸山	(29)	(16)	(8)		
36	琵琶塚古墳	下益城郡城南町塚原字丸山		47		5	
37	女夫塚古墳	下益城郡松橋町古保山字女夫塚	46	26	24	5	5.5
38	松橋大塚古墳	下益城郡松橋町松橋字大野	79	45	28	5	3
39	天神山古墳	宇土市野鶴町字桜畑	(110)	(60)	(40)	14	9
40	スリバチ山古墳	宇土市神合町字水谷	96	64	15	11	8
41	迫ノ上古墳	宇土市神合町字迫ノ上	54(56)	28(32)	(15)	4	2
42	城ノ越古墳	宇土市栗崎町字城ノ越	43.5	(23)			
43	楢崎古墳	宇土市花園町字楢崎	(32)	(18)	(15)	(3)	(2)
44	御手水古墳	宇土市松山町字御手水	(65)	(37)	(15)	(4.5)	(3.0)
45	向野田古墳	宇土市松山町字向野田	86	53.7	33.5	8	4
46	仁王塚古墳	宇土郡不知火町小曽部字北園	46.8	21.8	26.8	3.5	3.5
47	国越古墳	宇土郡不知火町長崎字国越	62.5	36.2	22.5	6.5	6
48	弁天山古墳	宇土郡不知火町長崎字弁天山	53.5	33.4		6	3
49	寺島1号墳 ?	宇土郡三角町戸馳字寺島					
50	東新城古墳	八代郡竜北町高塚字東新城	65	40	20	4	2
51	物見櫓古墳	八代郡竜北町野津字下北山王	70	38	29		
52	姫の城古墳	八代郡竜北町大野字北川	85	37	50	9	10
53	天提古墳	八代郡竜北町大野字天提					
54	中の城古墳	八代郡竜北町野津字上北山王	98	57	68	13	
55	端の城古墳	八代郡竜北町野津字上北山王	62	40	42	7.5	
56	有佐大塚古墳?	八代郡鏡町下有佐字大塚					
57	車塚古墳	八代市川田町東川田字大塚					
58	岡塚2号墳	八代市川田町東川田字岡塚	40		20		

外部施設	内部主体の構造	出土遺物	文献
周溝		周溝内より須恵器	⑮
	横穴式石室(装飾)		⑮
周溝	横穴式石室(装飾)	須恵器、鉄の小片	⑯
	粘土槨6	鉄鏃、金環、馬具残欠、金銅製金具	⑯
	石棺?	鉄剣、鉄鏃、金環、鎧片、玉類	⑯
	石棺?		⑯
周溝、朝顔形埴輪			⑰
	横穴式石室?	墳丘より須恵器	⑦
円筒・朝顔形埴輪			⑦
			⑱
壺形埴輪			⑦
葺石、壺形埴輪	竪穴式石室	鉄剣、刀子、鉋	⑦
	箱式石棺?	三角縁四神四獣鏡	⑲
	家形石棺3、石蓋土壙1 前方部に箱式石棺	直刀	⑱・⑳
葺石			(略測)
朝顔形埴輪、葺石	竪穴式石室内に舟形石棺	方格規矩鳥文鏡、内行花文鏡、四獣鏡、車輪石、勾玉、管玉、ガラス小玉、鉄剣、直刀、刀子、鉄斧	本書
周溝			⑱
円筒・形象埴輪、須恵器、葺石、排水施設	横穴式石室内に家形石棺(装飾)	画文帯神獣鏡、四獣鏡、獣帯鏡、鉄鏃、銅製椀、骨製飾付鉄矛、玉類、他多数	㉑
葺石、壺形埴輪	竪穴式石室		㉒
			③
円筒埴輪		墳丘より須恵器	
			⑦
周溝、円筒・形象埴輪、石製品			⑦
			⑦
周溝、円筒・形象埴輪			⑦
周溝、円筒埴輪			⑦
円筒埴輪			
			⑦
			⑦

No.	古　墳　名	所　在　地	墳丘の規標(m)				
			全長	後円部径	前方部幅	後円部高	前方部高
59	長塚古墳	八代市上片町字下野森					
60	八代大塚古墳	八代市上片町字下野森	55.8	28	49	4.5	3.5
61	竹原古墳	八代市竹原町					
62	高取上の山古墳	八代市上片町高取	59.09		16.3	3.64	3.6
63	乙町6号墳	八代市宮地町乙町					
64	亀塚古墳	球磨郡錦町西字亀塚	(28)			(3)	(1.5)

註 ◎ 地名表および分布図の作成にあたっては、次の方々に多くのご教示を受けることができた。記して謝意を表します。（敬称略）

三島　格・隈　昭志・杉村彰一・松本健郎・西　健一郎

◎ 表の外に前方後円墳の疑いがあるものもあるが、それらについては除外した。

◎ 墳丘の規模で（　）内の数値は、復原または推定を表わす。

◎ 付録としてあげた前方後円墳の墳丘測量図のうち、迫ノ上古墳は松本雅明教授を団長とする熊日（熊本日日新聞社）学術調査団の手によるものであり、松本教授の御厚意により掲載させていただくことができた。また仁王塚古墳は熊本商科大学・短期大学文化財研究会の手によるものであり、山下敏文氏の御厚意により掲載させていただくことができた。

◎ 迫ノ上古墳・仁王塚古墳以外の向野田古墳を含めた8基は富樫らが宇土高校社会部・同ＯＢとともに作成したものである。

外部施設	内部主体の構造	出土遺物	文献
			㉓
周溝、円筒・朝顔形・形象埴輪		墳丘より多量の須恵器	㉔
			㉓
	横穴式石室？		㉔
			㉓
			⑦

第19表　　熊本県内埴輪

番号	古墳遺跡名	所在地	墳丘	墳丘長	内部主体
1	三の宮古墳	荒尾市下井手字持田丸	前方後円墳	37m	横穴式石室(装飾)
2	別当塚東古墳	荒尾市本井手字亀原	円墳		竪穴式石室
3	塚山古墳	荒尾市下井手字山の上	円墳		竪穴式石室
4	院塚古墳	玉名郡岱明町開田字京塚	前方後円墳	78m	舟形石棺 4
5	稲荷山古墳	玉名市繁根木字宮中	前方後円墳		
6	伝佐山古墳	玉名市繁根木字北	円墳	35m	
7	カミの塚古墳	玉名郡天水町辺田見字徳丸	円墳		
8	経塚古墳	玉名郡天水町辺田見字城平	円墳		舟形石棺
9	大塚古墳	玉名郡天水町辺田見字城平	円墳		
10	塚坊主古墳	玉名郡菊水町江田字清原	前方後円墳	47m	横穴式石室(装飾)
11	虚空蔵塚古墳	玉名郡菊水町江田字清原	前方後円墳	53m?	
12	船山古墳	玉名郡菊水町江田字清原	前方後円墳	61m	横口式家形石棺
13	椿山古墳	玉名郡菊水町瀬川字白石	前方後円墳?		
14	岩原双子塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原字塚原	前方後円墳	102m	
15	狐塚古墳	鹿本郡鹿央町岩原字下原	円墳	38m	
16	チブサン古墳	山鹿市城字西福寺	前方後円墳	44m	横穴式石室(装飾)
17	中村双子塚古墳	山鹿市中字双子塚	前方後円墳	46m	
18	臼塚古墳	山鹿市石字臼塚	円墳?	28.6m	横穴式石室(装飾)
19	金屋塚古墳	山鹿市石字金屋塚	円墳	30m	
20	蛇塚古墳	菊池郡七城町亀尾字蛇塚	前方後円墳		横穴式石室?前方部に箱式石棺
21	フタツカサン古墳	菊池市木柑子字下向原	前方後円墳	41.8m	
22	高熊古墳	鹿本郡植木町古閑字天神平	前方後円墳	61.5m	
23	大塚古墳	鹿本郡植木町正清字大塚			
24	葉山塚古墳	飽託郡北部町飛田字上原	円墳	24m	
25	富の尾3号墳	熊本市池田町富尾	前方後円墳?	30m	横穴式石室
26	長目塚古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛	前方後円墳	111.5m	前方部に竪穴式石室
27	上鞍掛塚A古墳	阿蘇郡一の宮町中通字上鞍掛	前方後円墳	65.5m	
28	井寺古墳	上益城郡嘉島町井寺字富屋敷	円墳	20m	横穴式石室(装飾)
29	琵琶塚古墳	下益城郡城南町塚原字丸山	前方後円墳		

出　土　地　名　表

(1978. 4 現在)

時期	埴輪											文献	備考
	壺形	円筒	朝顔形	人物	鳥形	馬形	家形	楯形	靫形	短甲	その他不明		
中～後		○										①	武装石人
中							○					㉕	
											○	㉕	(形象埴輪)
中	○											②	
			○									③	
		○										㉖	
											○	㉗	
中		○										③	
		○										③	
中～後		○	○	○	○?							⑤	
後		○										⑤	
中～後		○	○									⑤・⑥	
											○	㉗	
中		○										⑧	
中		○						○					
後		○										①・⑨	石　人
後		○										⑦	
後		○	○	○								㉘	石　人
中～後		○	○									㉙	
後		○		○?				○?				㉚	
											○	⑦	石人？
中～後		○	○	○								⑪	
									○			㉛	
							○?					㉜	古代推定
		○										①・㊼	
中	○											⑭	
中		○										㉝	
												㉞	
中		○	○									⑰	

番号	古墳遺跡名	所在地	墳丘	墳丘長	内部主体
30	松橋大塚古墳	下益城郡松橋町松橋字大野	前方後円墳	79m	
31	前田遺跡A地点	下益城郡松橋町大野字前田	出土地		
32	スリバチ山古墳	宇土市神合町字水谷	前方後円墳	96m	
33	迫ノ上古墳	宇土市神合町字迫ノ上	前方後円墳	54m	竪穴式石室
34	神合古墳	宇土市神合町	円墳		
35	轟貝塚	宇土市宮庄町字須崎	出土地		
36	西岡台遺跡	宇土市神馬町字千畳敷	出土地		
37	向野田古墳	宇土市松山町字向野田	前方後円墳	88.5m	竪穴式石室(舟形石棺)
38	国越古墳	宇土郡不知火町長崎字国越	前方後円墳	62.5m	横穴式石室(装飾)
39	弁天山古墳	宇土郡不知火町長崎字弁天山	前方後円墳	53.5m	竪穴式石室
40	道免古墳	宇土郡不知火町長崎字道免	円墳		
41	鴨籠東古墳	宇土郡不知火町長崎字城の越			横穴式石室
42	塚原平古墳	宇土郡不知火町高良字塚原平	円墳	約25m	横穴式石室
43	高塚東原遺跡	八代郡竜北町高塚字東原	方形周溝墓?		
44	東新城古墳	八代郡竜北町高塚字東新城	前方後円墳	65m	
45	姫の城古墳	八代郡竜北町大野字北川	前方後円墳	85m	
46	中の城古墳	八代郡竜北町野津字上北山王	前方後円墳	98m	
47	端の城古墳	八代郡竜北町野津字上北山王	前方後円墳	62m	
48	有佐大塚古墳	八代郡鏡町下有佐字大塚	前方後円墳?		竪穴式石室(前方部?)
49	園の迫1号墳	八代郡宮原町立神字園の迫	円墳	26m	礫床
50	岩立C古墳	八代郡宮原町立神字岩立	円墳	19m	横穴式石室
51	蕾園古墳	八代郡宮原町立神字蕾園	円墳		
52	野寺寺院跡	八代郡宮原町平原字野寺	出土地		
53	八代大塚古墳	八代市上片町字下野森	前方後円墳	55.8m	
54	鳩山古墳	八代市鳥越町			
55	竹原古墳	八代市竹原町竹原神社境内	円墳		
56	カミノハナ1号墳	天草郡松島町字永浦	円墳	13m	

註 ◎ 地名表作成にあたっては次の方々に御教示を得ることができた。記して謝意を表します。(敬称略)
富樫卯三郎・三島格・江上敏勝・伊藤奎二・川西宏幸・松本健郎
なお地名表に挙げたもののうち、報告などに埴輪の出土が報じられていながら、現地で確認できなかったものも含む。

時期	埴輪											文献	備考
	壺形	円筒	朝顔形	人物	鳥形	馬形	家形	楯形	靫形	短甲	その他不明		
中～後		○	○?										
中～後		○	○									㉟	
前	○											㊽	
前	○												
		○											
		○											
		○										⑱	
前			○									本書	
中～後		○	○	○		○					○	㉑	
前	○											㉒	
後		○		○								㊱	
		○	○									㊲	
後		○										㊳	略測
前	○											㊴	
		○											
後		○	○			○		○				㉓	石製品(翳・蓋・靫)
後		○		○								㉓	
後		○										㉓	
前～中・後		○										㊵	埴輪は二時期
後		○										㊶	
後		○										㊷	
											○	㊸	
後		○											
後		○	○	○			○			○		㊹	
		○										㉗	
		○										㊺	
		○		○								㊻	

前方後円墳・埴輪地名表参考文献

① 梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下に於ける石人と其の表飾の古墳」（熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊）、1925

② 乙益重隆・田辺哲夫・三島格・田添夏喜「院塚古墳調査報告」熊本県文化財調査報告第6集、1965

③ 熊本県教育委員会『熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表　昭和51年度』、1977

④ 三島格他「山下古墳調査概報」熊本史学第50号記念特集号、1977

⑤ 西田道世「船山」菊水町教育委員会文化財調査報告書　第Ⅰ集、1976

⑥ 梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告　第1冊、1922

⑦ 三島格「肥後における古墳研究―戦後の成果と問題点―」古代文化第17巻第3号、1966

⑧ 田辺哲夫「岩原古墳」熊本史学第12号、1957

⑨ 下林繁夫「チブサン古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第4冊、1927

⑩ 隈昭志・杉村彰一「熊本県山鹿市竜王山古墳調査報告―竪穴式石室の一例―」考古学雑誌第57巻第3号、1972

⑪ 田辺哲夫「高熊古墳調査報告（その1）」「高熊古墳調査報告（続）」玉名高校考古学部部報第7号・第18号第2部、1964・1967

⑫ 田辺哲夫他「石川山古墳群調査報告」熊本県文化財調査報告第9集、1968

⑬ 乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」熊本県文化財調査報告書第3集、1963

⑭ 坂本経堯「阿蘇長目塚」熊本県文化財調査報告書第3集、1963

⑮ 緒方勉・高木正文「久保遺跡」熊本県文化財調査報告第18集、1975

⑯ 三島格「原始―古墳時代」城南町史、1965

⑰ 野田拓治・島津義昭・江本直ほか「塚原」熊本県文化財調査報告第16集，1975

⑱ 富樫卯三郎他「宇土城跡（西岡台）」宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、1977

⑲ 富樫卯三郎「宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獣鏡」熊本史学第33号、1967

⑳ 梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「宇土郡楢崎の古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊、1925

㉑ 乙益重隆「不知火町国越古墳」昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報、1967

㉒ 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報―新発見の肥後最古の竪穴式石室墳―」熊本史学第30号、1965

㉓ 江上敏勝「原始―古墳時代」竜北町史、1973

㉔ 八代市教育委員会『八代市の文化財　第3集』、1974

㉕ 三島格「三の宮・別当塚・塚山」荒尾市文化財解説　第1集、1971

㉖ 田添夏喜「伝佐山古墳調査概報」玉名高校考古学部部報　第17号、1966

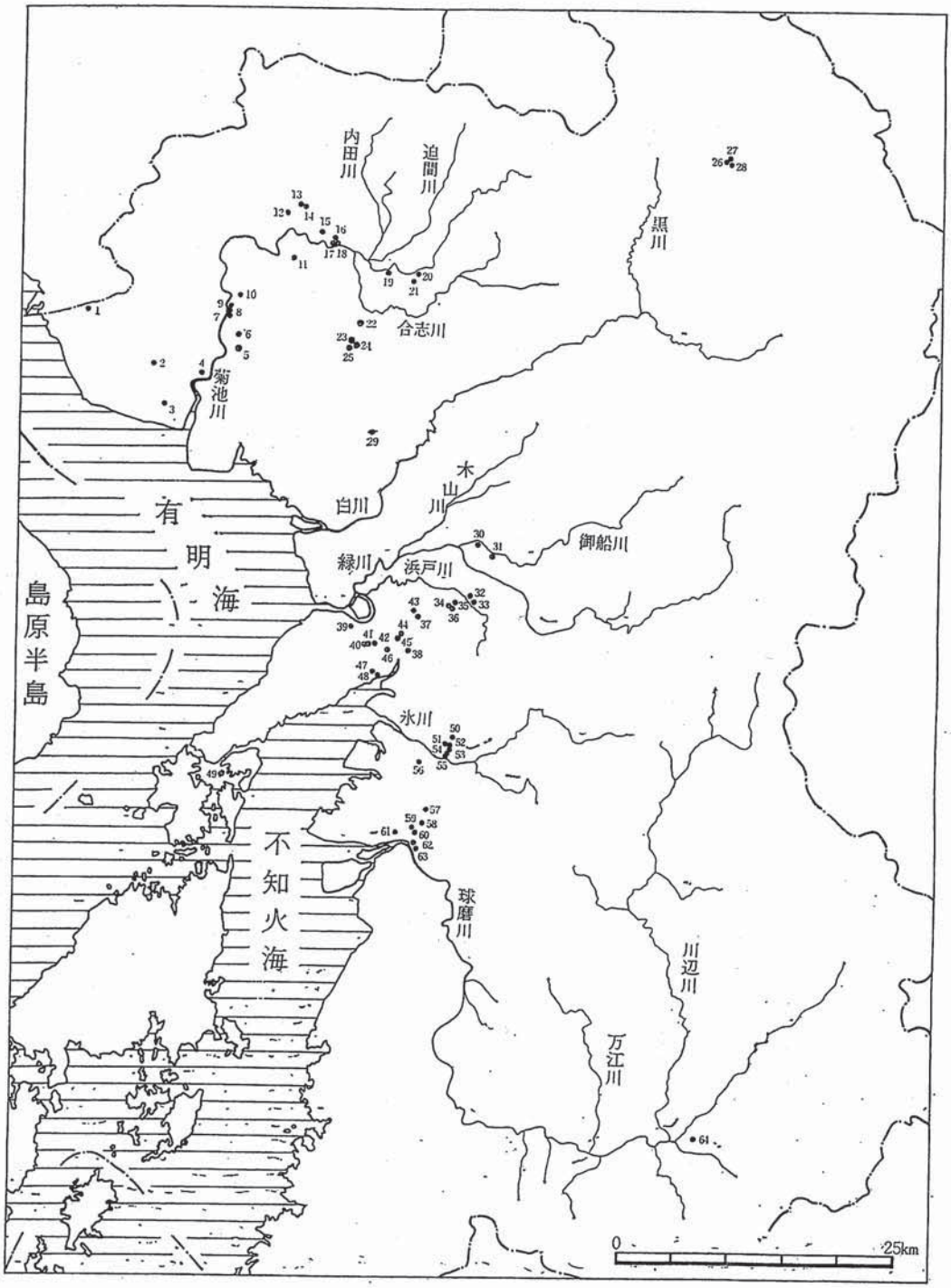
㉗ 熊本県教育委員会『熊本県埋蔵文化財遺跡地名表（昭和37年度）』、1963

㉘ 原口長之『臼塚古墳調査報告』プリント版、1956

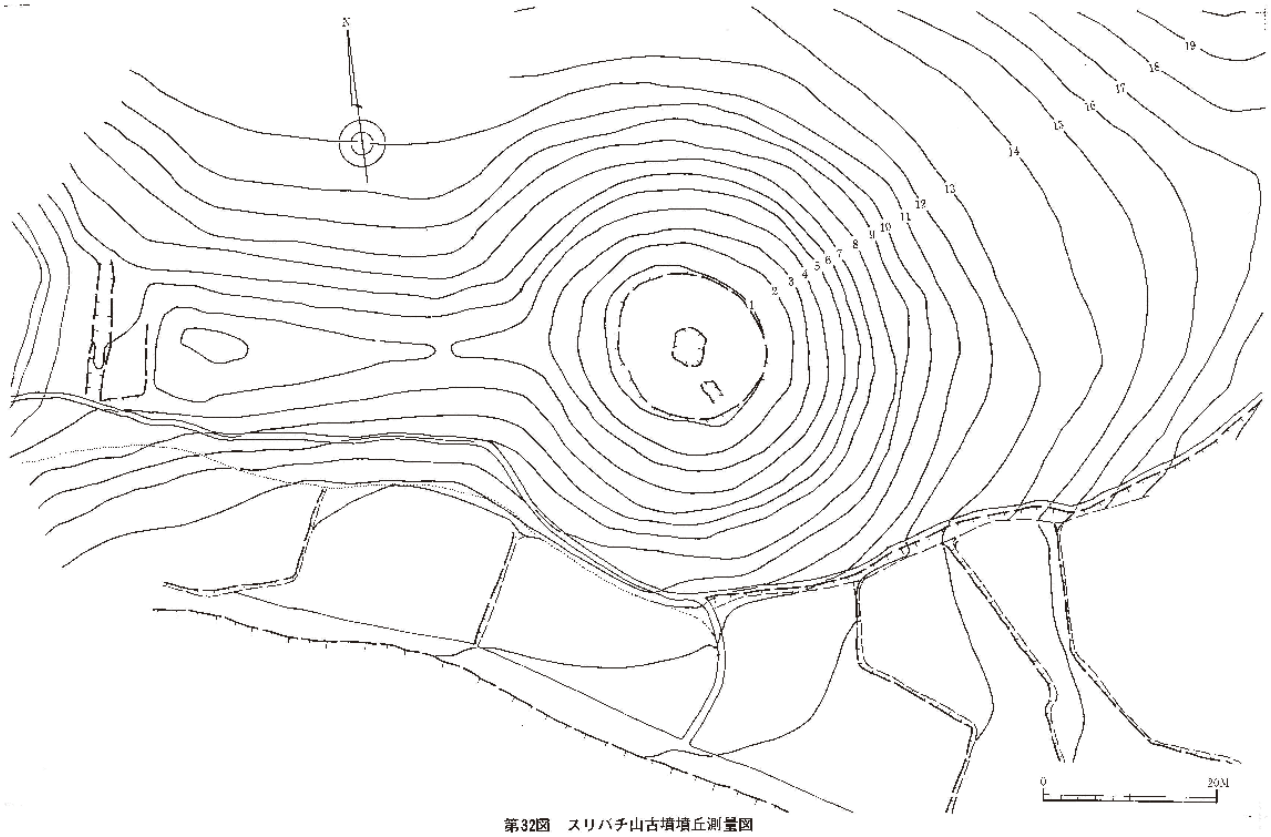
㉙ 隈昭志「金屋塚の沿革」チブサン　第14号、1969

㉚ 坂本経堯ほか『熊本県史総説編』、1965

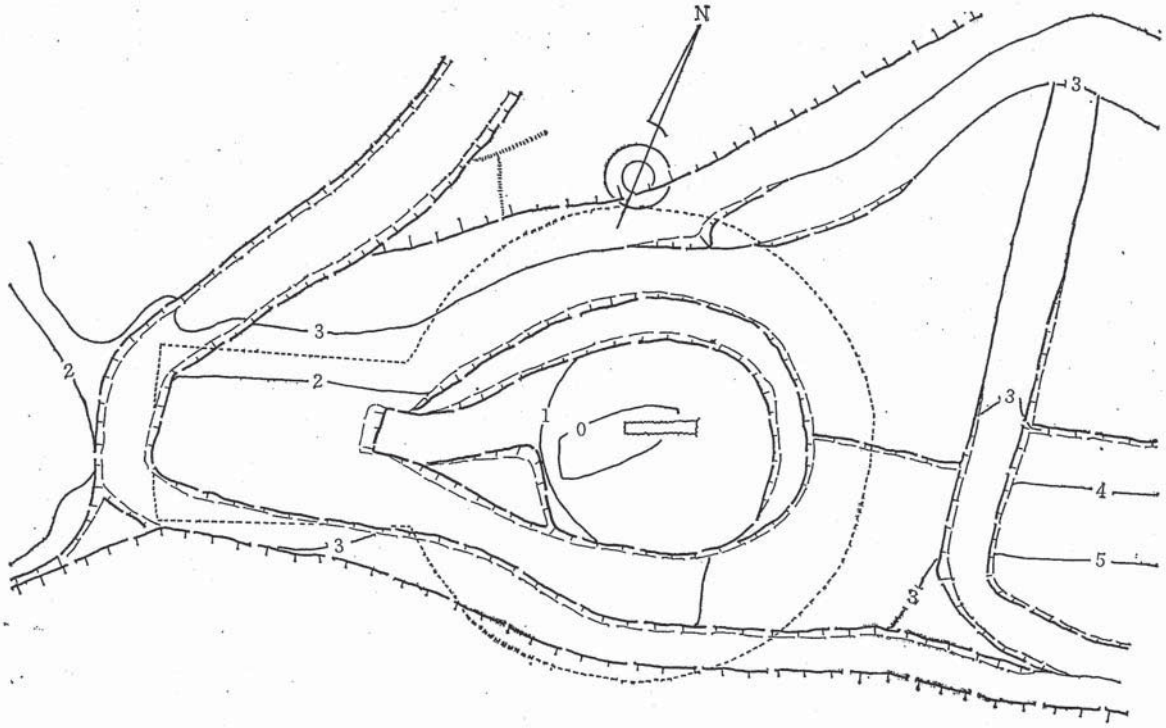
㉛ 三島格「ハニワ（形象埴輪）の分布」熊本の歴史１、熊本日日新聞社、1958
㉜ 三島格「肥後国鮑託郡北部村発見の家形埴輪について」九州考古学10、1960
㉝ 熊本日日新聞
㉞ 浜田・梅原・島田「肥後国上益城郡嘉島村井寺古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告第１冊、1917
㉟ 伊藤奎二作成「松橋町前田遺跡出土埴輪実測図」、未発表
㊱ 熊本県教育委員会「遺跡地名表（追加及び工事関係分）」、1965
㊲ 坂本経堯「鳴籠２号古墳」不知火町史、1972
㊳ 富樫卯三郎氏採集資料による
㊴ 花岡興輝「八代郡竜北村における土師器の埋没遺跡について」熊本史学　第11号、1957
㊵ 永松豊蔵氏採集資料による
㊶ 乙益重隆「八代郡宮原町園の迫古墳」日本考古学年報11、1962
㊷ 村井真輝「岩立Ｃ古墳」九州自動車道と文化財第１号，1977
㊸ 松本雅明「彙報」熊本史学第15号・第16号、1959
㊹ 江上敏勝「熊本県八代市上片町大塚古墳（前方後円墳）出土埴輪について」夜豆志呂第36・37合併号、1974
㊺ 江上敏勝氏のご教示による
㊻ 坂本経堯・坂本経昌『天草の古代』、1971
㊼ 乙益重隆「富ノ尾３号墳」熊本市西山地区文化財調査報告書、1969
㊽ 富樫卯三郎「擂鉢山古墳」宇土市の文化財第３集、1977



第31図　　熊本県内前方後円墳分布図

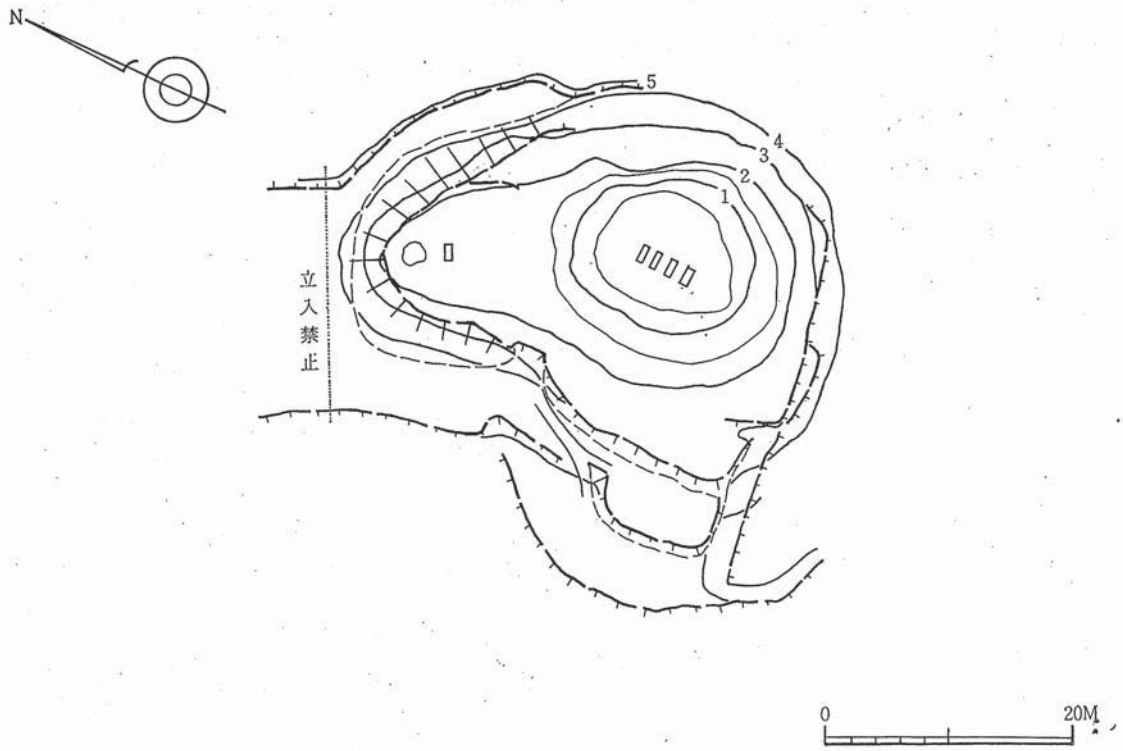


第32図　スリバチ山古墳墳丘測量図



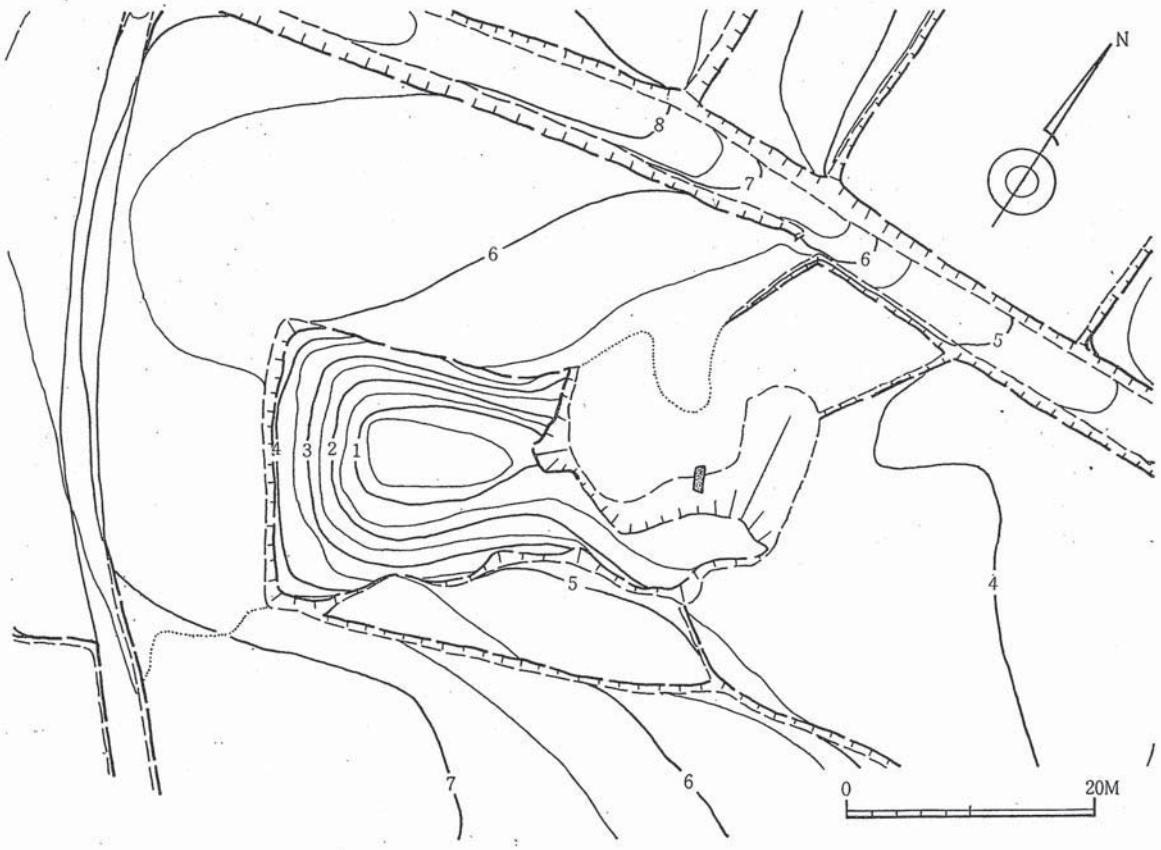
註：① 測量図はブルドーザーによって削平されたのち作製
② ┊┈┈┈┊ 線は発掘の結果確認された墳丘

第 33 図　　迫 ノ 上 古 墳 墳 丘 測 量 図

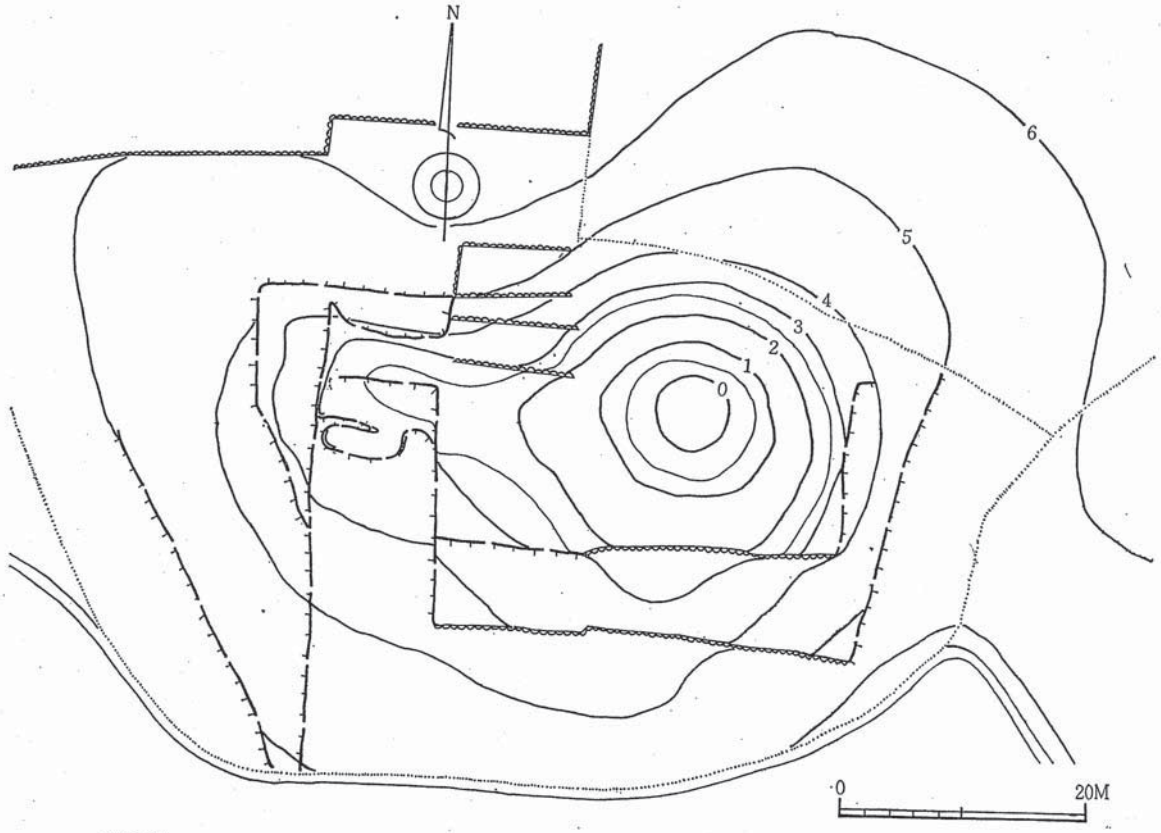


第34図　　楢崎古墳墳丘測量図

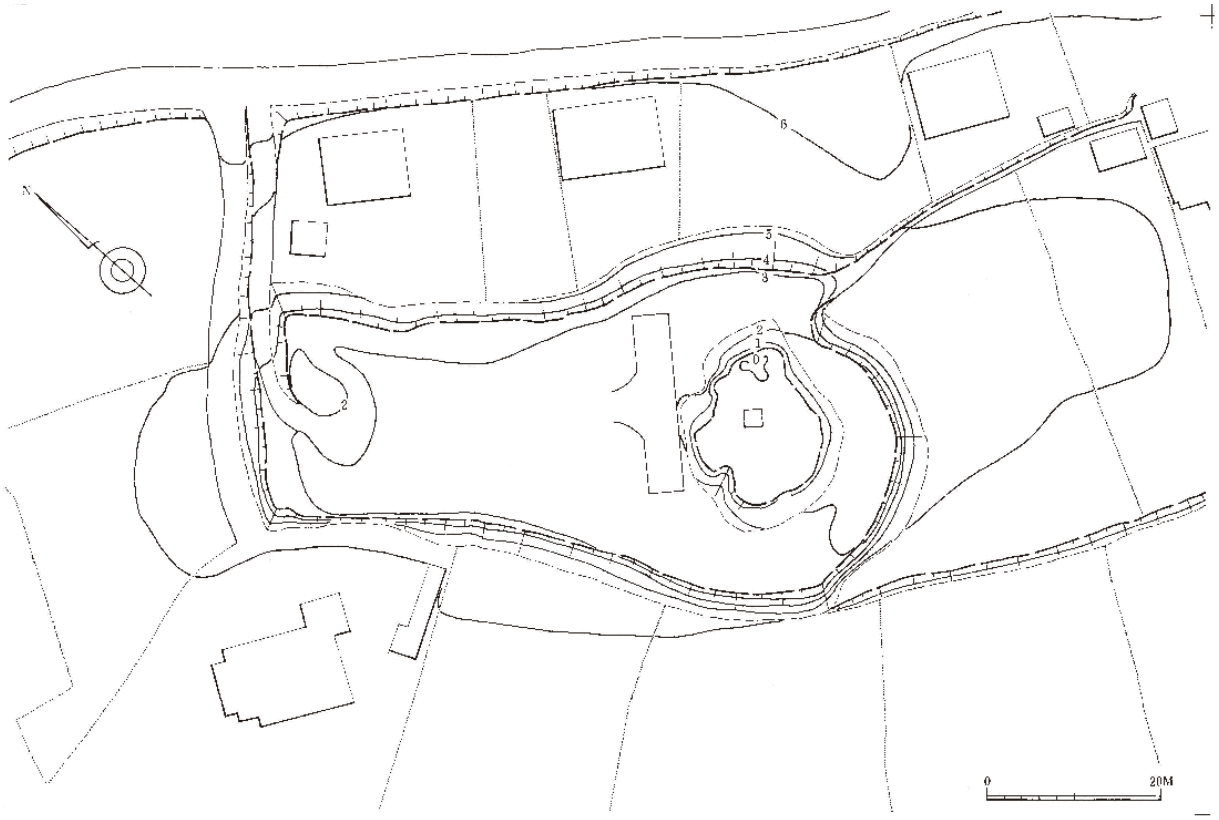
第35図　天神山古墳墳丘測量図



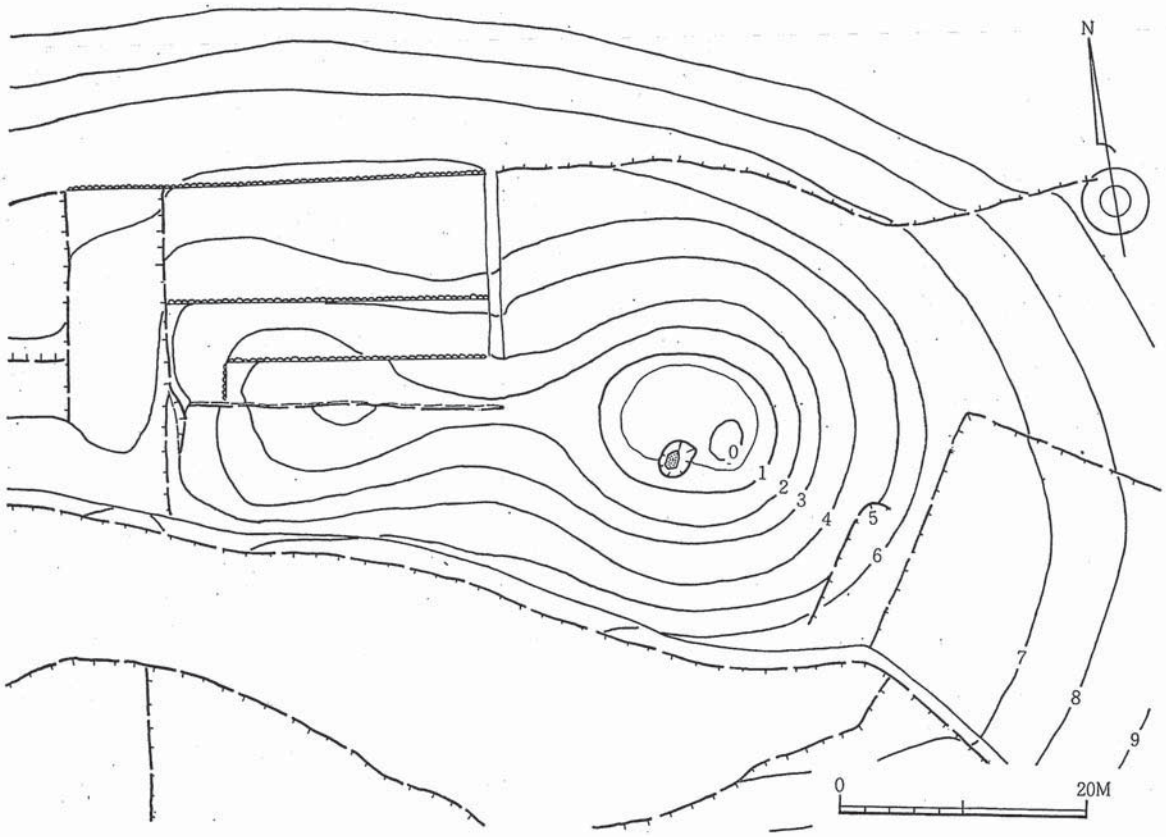
第36図　　女夫塚(男塚)古墳墳丘測量図



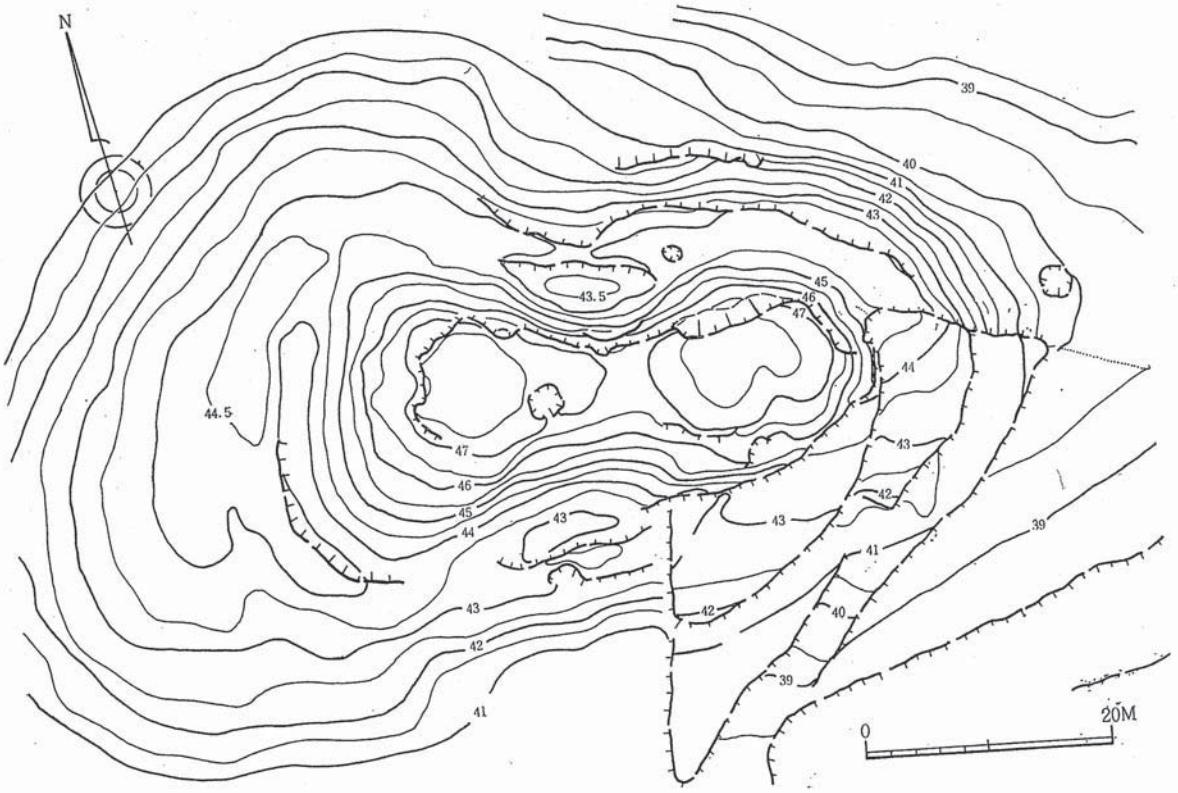
第37図　　弁天山古墳墳丘測量図



第38図　松橋大塚古墳墳丘測量図



第39図　　国越古墳墳丘測量図



第40図　　仁王塚古墳墳丘測量図